

平成二十八年度

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十九年三月

一般社団法人 高山市文化協会

序

一般社団法人 高山市文化協会は、高山市から委託を受けて、飛騨地域の近代文学についての調査・研究と資料の収集を行い、途中経過を含めて成果を随時発表しています。

平成二十八年度は、江戸時代後期に開設され、飛騨地域の文学と文化の振興に多大な影響を与えた教授所「静修館」と、創設者の赤田臥牛、子の章斎、孫の誠軒の活動と、その私塾が育てた文学者はもとより、武家・役人・町人の関わりについて、歴史・文学資料等を調査し、報告書にまとめました。

現在、調査も研究も途中ですが、時期を見て次の報告書を出版したいと考えています。今後とも、引き続き郷土の文学者とその作品を紹介して、高山市の文学及び文化の発展に寄与してまいります。

平成二十九年三月

「目次」

【静修館】

1	学問教授所静修館と赤田三代
2	「釈奠（せきてん）」祭壇飾り一式・瓦豆
3	高山町教授所取建願・附（写）
4	高山町教授所取建上申書（写）
5	高山町教授所場所替願書写
6	教授所絵図面（教授所再興願出書）
7	菊地愿明詩稿 大原亀五郎元締（静修館塾生詩稿）
8	上田濟世詩稿（静修館塾生詩稿）
9	教授所規定書
10	童蒙訓
11	飛驒先儒赤田氏修墓記事

【赤田臥牛】

12	蘭亭尚齒會詩有序略之（七言絶句）
13	一時詞客興相仍（七言律詩）
14	添蓮（七言絶句）
15	青青杜若滿前池（七言絶句）
16	寄題小谷長圓道場（七言絶句）

2	16	17	18	20	21
---	----	----	----	----	----

【赤田章斎】

17	昔者（七言絶句）	35	足立某のために章斎が画とともに書いた「歸去来の辞」
18	謹茲拜祝因賦一	34	小楼偶来（五言絶句）
19	真宗上人初過訪（七言絶句）		
20	臥牛⇄館柳湾（消息）		
21	飛驒籠渡し図（大森旭亭筆）		
22	臥牛集		
23	次韻和（七言絶句）		
24	赤田臥牛詩文稿（遺稿）		
25	匡廬憶昨踏雪■（七言絶句）		
26	如来示目通（書状）		
27	一自老胡畢化縁（七言絶句）		
28	題獨木橋（七言絶句）		
29	臥牛自作銘竹掛花入		
30	三福寺十勝		
31	屏風（二曲一双）		
32	屏風（六曲一双）		
33	樹密（七言二句）		
		46	
		45	
		44	
		43	
		42	
		41	
		40	
		39	
		38	
		35	
		34	
		27	
		26	
		25	
		24	
		23	
		22	
		21	
		20	
		19	
		18	
		17	
		22	
		23	
		24	
		25	
		26	
		27	
		34	
		35	
		38	
		39	
		40	
		41	
		42	
		43	
		44	
		45	
		46	
		48	
		49	

【静修館】

【静修館】

1 学問教授所静修館と赤田三代

江戸時代後期、日本全体の流れとして学問の担い手が武家・役人から町人へと移って行き、その流れをくみ高山からも多くの町人学者が生まれている。赤田三代と言われる臥牛・章斎・誠軒が出た赤田家も元は酒造業を営む商家であった。

これまで取り上げられることの少なかった赤田三代であるが、絵画・俳諧等多彩に活躍した津野滄洲、飛驒の俳諧の第一人者であり雲橋社の創始者である加藤歩簫、本居宣長門下の国学者田中大秀などと同時期に、赤田臥牛は活躍している。『斐太後風土記』を著した富田礼彦は章斎の門下で学び、山岡鉄舟は幼少時代に誠軒の教えを受けるなど、赤田三代は飛驒の文化人に大きくかわっている。

教授所静修館は、赤田臥牛やその弟子が中心になり、飛驒で学問を志す者のために開設されたもので、教えたのは中国の朱子学に様々な学派の内容を取り入れた折衷学である。臥牛が興した静修館は、息子の章斎・孫の誠軒へと受け継がれ、静修館は「飛驒で学問をする者で学ばないものはなかった」と言われ、飛驒の学問の拠り所となっていた。

「静修館の沿革」

文化二年（一八〇五） 一之町の赤田家居宅隣にて開校

天保三年（一八三二） 二代目章斎の時、高山町で大火が起り類焼焼失

天保五年（一八三四） 馬場町（えび坂上の角地）に移転

弘化一年（一八四四） 神明町角（神明駐車場あたり）に移転

臥牛五十八歳の時、飛驒郡代田口五郎左衛門の援助のもと、幕府の許可を得て開かれた。開設費用は門人たちの寄付によりまかった。門人は数百人あったと言われている。

漢学を教授する学問所であったことから、儒教の先哲である孔子を祭る儀式「釈奠」（せきてん）が毎年行われ、この日は役場が休みになり郡代も参列した。これは、藩における藩校並みの扱いだったとされる。

歴代の郡代の庇護を受けながら受け継がれた静修館であったが、明治に入り学問教授方となった三代目誠軒は梅村知事と意見が対立。

これにより静修館は閉じられることとなった。

○赤田臥牛 延享四年（一七四七）～文政五年（一八二三）

名は朱義・元義 通称は赤田新助 号は臥牛山人等。

幼いころより学問の才があったが、家業の酒造業を重んじる父親は臥牛が学問をすることを喜ばなかった。飛驒にあって、学問の師もなく、また共に学ぶ学友もない。この状況に手を差し伸べたのが酒造業・養蚕業を営む文人津野滄洲であった。彼の導きで尾張の松平君山、浅井図南らの儒学者に学ぶ機会を得、臥牛の才能は花開く。飛驒に赴任した郡代も臥牛に学ぶようになり、後に田口郡代の援助を受け学問所静修館を開設し飛驒の学問の中心となった。

「臥牛の文字」

見慣れれば「臥牛の字」と分かる癖のある文字を書く。住香草文庫には臥牛の手書きの原稿等が多く残されているが、漢字のみで書かれたものは踊るような面白い字。くずし字で書かれたものはくせ字でとても読み辛い。

○赤田章斎 安永四年（一七七五）～弘化二年（一八四五）

名は光暢 通称は赤田晋助 号は鋸埜逸民等。

父臥牛の跡を継ぎ静修館で門人に教授した。性格は教敬謹慎（まじめで礼儀正しい）弟子には友に対するようであったとされる。（『濃飛文教史』）これにより弟子の数は益々増えたと言われている。父臥牛の死後五年たって、津野滄洲の息子延賢と共に『臥牛集』十巻を出版した。

「章斎の文字」

現代の私たちでも一見して読める部分が多い整った文字を書いており、この特別展準備においても、“これはすぐ読めそうだな”という資料を抜き出したら全て章斎のものであった。

○赤田誠軒 天保二年（一八三一）～明治六年（一八七三）

名は昭・商衡 通称は赤田新助・晋助・瑛次郎等。

学才高く、父章斎の教えを受け八歳にして素読（漢文の書籍を音読すること）を静修館の門人に教授したほどである。性格は品行方正、誠意誠心。幅広く学問を修めた。（『濃飛文教史』）

明治に入り、梅村速水知事より高山県の学問教授方に任ぜられた。月に一度一般民衆を集め雑講として様々なことを分かりやすく講義した。後に梅村知事と意見が合わず対立し静修館を閉じる。北越加賀・能登などを巡り、金沢に居を構えた。最後は病を得て高山に戻り四十二歳で亡くなった。

★豆知識1

「教授所静修館は漢学を教える学校でした！」と言われても、「ふーん・・・？」と思われるのではないのでしょうか？

「漢学」つまり中国の学問は、日本が中国から漢字を輸入して以来日本人の学ぶべきものとして根付きました。ヨーロッパの学問が入ってくるようになるまでは、「学問する」といったら「漢学を修めること」だったのです。テレビの時代劇で武家の子供が音読しているのは『論語』など。「子のたまわく・・・」などと言っていますね。

現代でも、例えば表彰状の「日頃の努力の成果を讃えここにこれを賞します」などというのはいかにも漢文の読み下し調です。便利な仮名文字を作り出そうとも、長い間日本の正式な文章は漢文でした。その漢学を教える教授所だったので、お役所のトップも教えを乞い、公にも認められた学校となったわけです。

★豆知識2

明治のころまで「漢詩の一つも作れなければ、知識人とはいえない」というほど、漢詩は知識人文化人の重要なたしなみの一つでした。

漢詩のブームは歴史の中で何度かありますが、江戸時代にも大きなブームがありました。中国の儒学を学ぶ人（儒者）が漢詩を作り、大量の漢詩集が世に出ています。臥牛は愛知・滋賀・京都などの儒学者から教えを受け交流し学問を進めました。赤田臥牛の『臥牛集』もこの時代に出された漢詩集の一つといえます。

「枳奠（せきてん）」祭壇飾り一式・瓦豆



（飛騨高山まちの博物館蔵・掛軸）



（一之宮支所蔵）

（静修館に飾られていた孔子図）

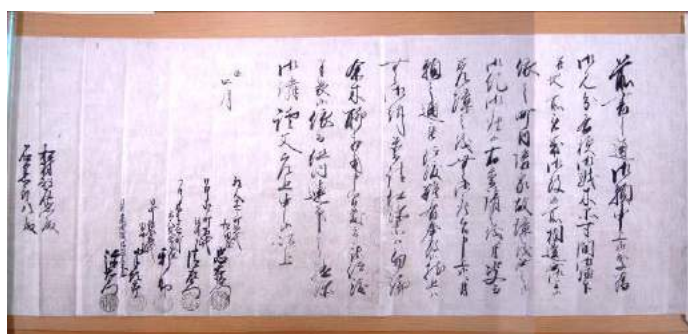
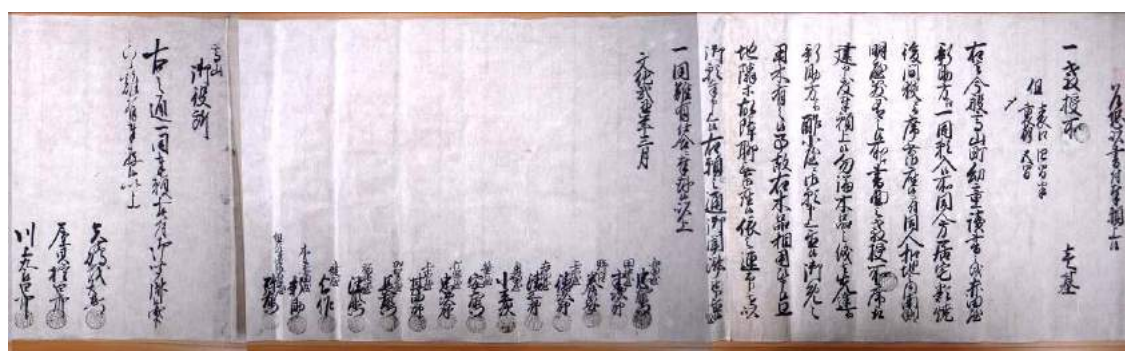
「瓦豆」

瓦^がとは焼き物、豆^{とう}とは高坏を示す。飛騨教諭所の枳奠に使用された容器である。

枳奠とは、孔子を祭る典礼のことで、毎年二月と八月の二回、その月の丁^{ひのと}の日に執行された。天保十三年二月の時、時の豊田郡代が之に参拝し、以後歴代の郡代が参拝している。

（祭具・瓦豆 一式）

高山町教授所取建願・附(写)

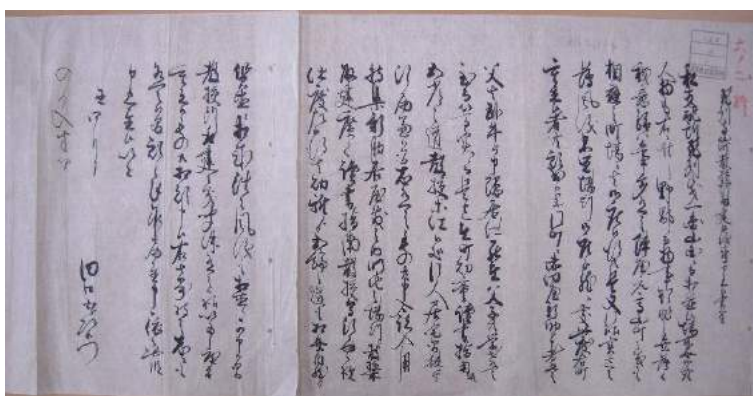


(県歴史博物館蔵[1・53-2-1]・文書)

臥牛が静修館を開設するにあたり高山御役所へ願ひ出た文書。
 これまで子供に漢籍を読むことを教えていたが、手狭になり席も足りない
 ので隣接地にある空き屋敷を整備したい。材料の材木などは既にあるの
 で調達については大丈夫だ、と高山御役所あてに届け出ている。

○附録『岐阜県教育史 第二部』寺子屋・郷学 高山町教授所「五〇 高
 山町教授所取建願」に読み下し文有。

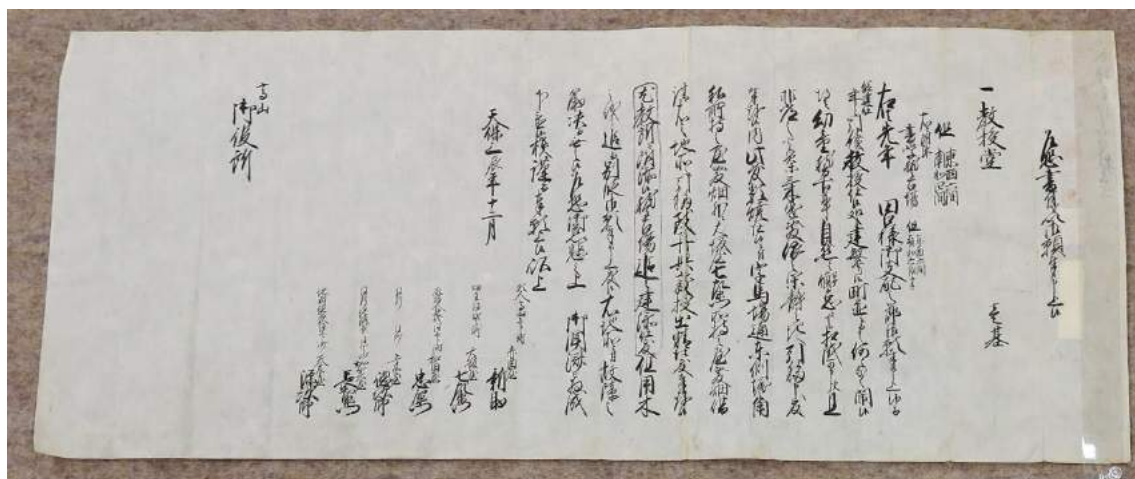
4 高山町教授所取建上申書(写)



(県歴史博物館蔵[1・53-2-2]・文書)

○附録『岐阜県教育史 第二部』寺子屋・郷学 高山町教授所「五一 高山町教授所取建上申書」に読み下し有。

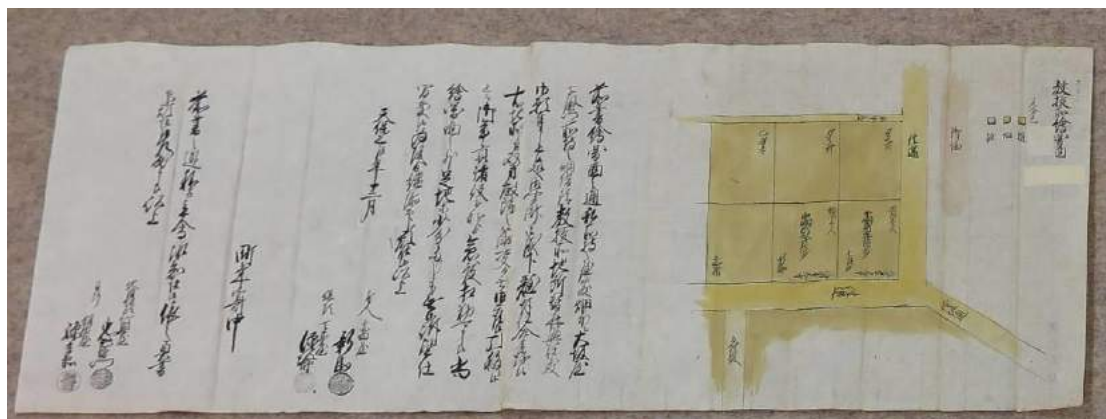
高山町教授所場所替願書写



(飛騨高山まちの博物館蔵[角竹 2-46-1]・文書)

○附録『岐阜県教育史 第二部』寺子屋・郷学 高山町教授所「五二 高山町教授所場所替願」に読み下し有。

教授所絵図面（教授所再興願出書）



（飛騨高山まちの博物館蔵[角竹 2-46-2]・文書）

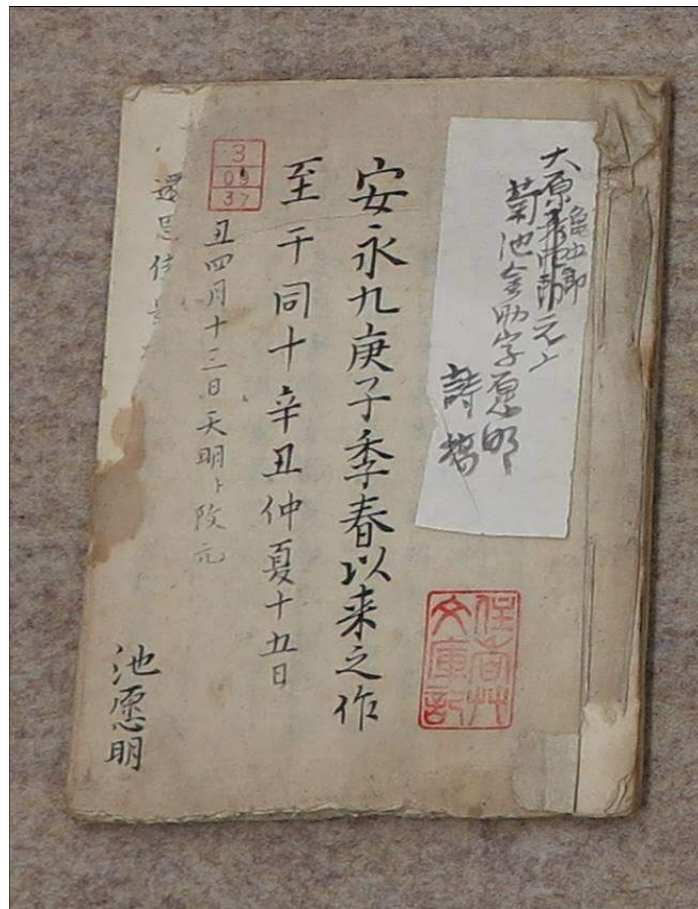
最初一之町にあった静修館は火災の類焼に遭い、天保五年にえび坂上角地で再出発する。この文書は天保三年に教授所再興について町年寄に願い出たもの。元々所有していた赤田家の土地に並んで森七左衛門家の土地があり、そこも借り受けて教授所を建てることを願い出ている。

森七左衛門家は森七の名で知られた味噌醤油業をいとなむ豪商で、文化人も多く出ている。

○附録『岐阜県教育史 第二部』寺子屋・郷学 高山町教授所「五二附 高山町教授所絵図面」に読み下し有。

7

菊地愿明詩稿 大原亀五郎元締（静修館塾生詩稿）



（飛騨高山まちの博物館蔵[住 3・09-37]・冊子）

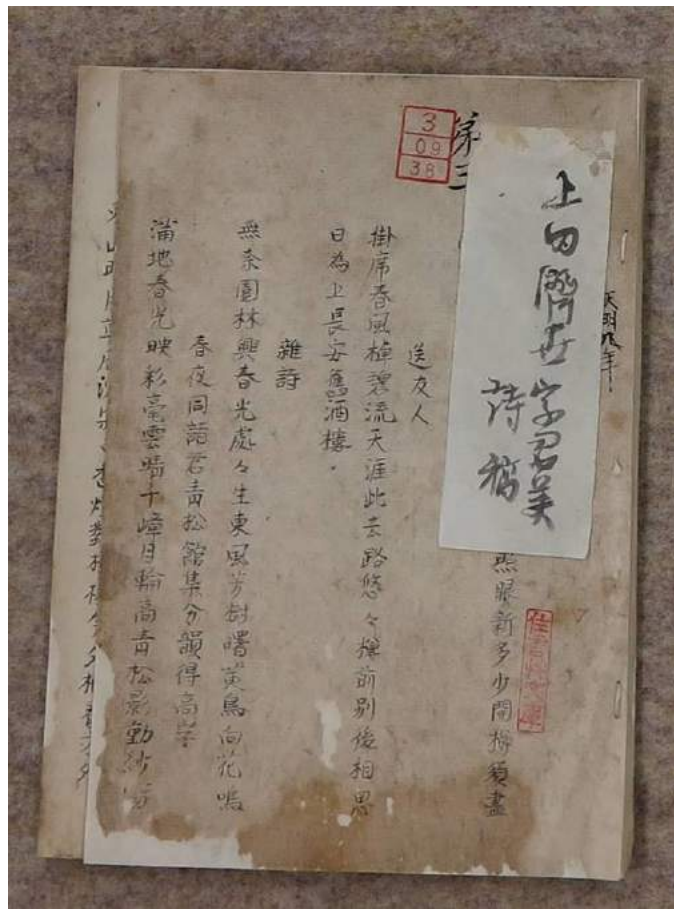
大原亀五郎元締 菊地金助の詩稿。

大原亀五郎は『高山市史 徳川氏直轄時代』に名前が見られる。手附・手代は役所の長官として幕府から派遣される代官・郡代の補佐役で、その中でも首席の者が元締である。幕府の役人も通って教えを受けていたことが実際に分かる資料である。

メモ書きで「是より定会宿題」とある。俳句などと同じ様に次回の定例詩会に向け、「お題」が出されて、それまでに詩を作って行く宿題があったことがうかがえる。

十三代郡代大原亀五郎は十二代代官大原彦四郎の息子。大原親子の時に大規模な百姓一揆「大原騒動」が起こった。亀五郎が郡代となつた頃、臥牛は三十代であつた。

8 上田済世詩稿（静修館塾生詩稿）

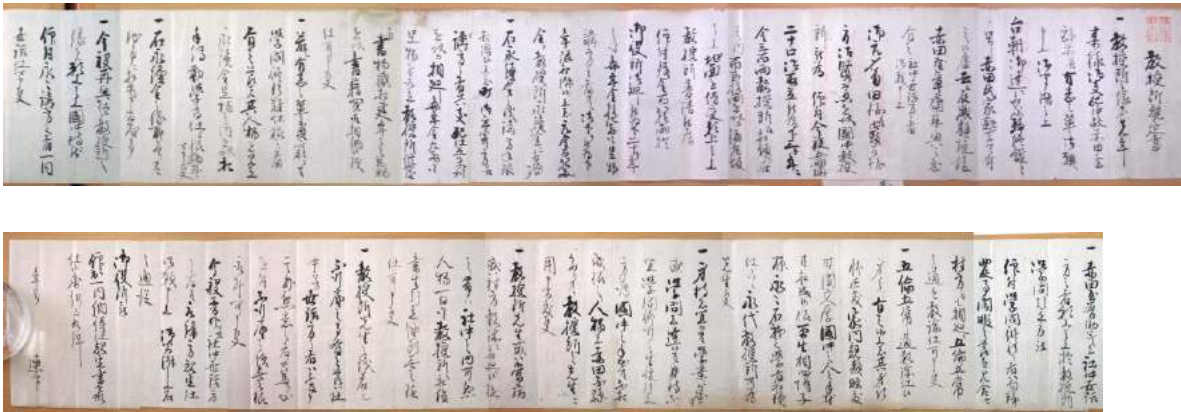


（飛騨高山まちの博物館蔵[住 3・09-38]・冊子）

上田済世の詩稿。

上田済世は、名医で知られた臥牛の弟子。弟子の中でも特に漢詩が得意だったらしい。『臥牛集』にも名前が頻繁に出てくる人物。臥牛の漢詩は江村北海撰の『日本詩選』に五点載せられているが、済世の漢詩も一点選ばれている。

教授所規定書



(飛騨高山まちの博物館蔵[角竹 2-46-9]・文書)

章斎の代で教授所再興を願ひ出た際、この規定書を作り役所に提出した。教授所の姿勢や運営方法を決めてある。

〔主な内容〕

赤田臥牛が静修館を開き家塾としていましたが大火で類焼焼失したため息子の章斎の代で再興したいと思います。

この教授所で先生となるものは、静修館での教授ばかりか国中（飛騨全域）に出向き教え、またその人たちの手本となるような人物でなければなりません。章斎は静修館の先生となるのにふさわしい人物です。

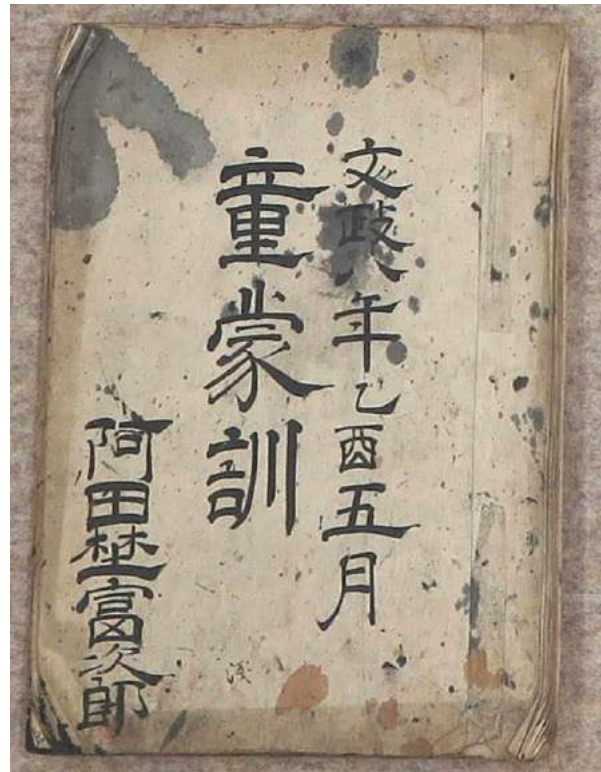
行動の悪いもの、国中の手本とならないような者は、例え赤田家出身者であっても先生とは認めません。

章斎が病気または外回りで不在となっている時は、塾生の中で学問の進んでいるものが代理を務めます。

先生・塾生共々不行き届きがないよう全員で気を付けます。

○附録『岐阜県教育史 第二部』寺子屋・郷学 高山町教授所「五三 高山町教授所規定書」に読み下し有。

童蒙訓



(個人蔵・冊子)

〔童蒙訓〕

童蒙への教え（童蒙は、物事を知らない子ども、又は何かを習い始めの初心者のこと）
聖人の道は孔子が集大成。堯舜に始まり、殷・西周を経て、東周の末に孔子が生まれた。孔子の「論語は」、宇宙第一の書である。

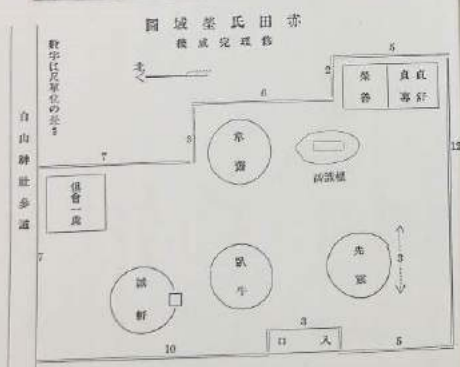
父義・母慈・兄友・弟恭・子は孝行という五教。人が人たる五倫（君主・父・夫婦・朋友、長幼のあるべき姿）。孟子の教えである五常、仁義礼智信とはどういうものか。智・仁・勇の三徳とはどういうものか。
学問するのならば、幼い時から朝に夕にこれを暗唱し、自分を磨く姿勢を持ち続けなさい。怠けてはならない。道を得たならば、愚者は賢者に、貧しいものは豊かになる。常々これを心に留め、おろそかにしてはいけないぞ。

飛騨先儒赤田氏修墓記事



赤田三先生墓前祭記

大正十五年十一月一日



罪を問ふるに如く、改葬は他厚葬に劣るは如何にも申せなしと一時は思ひしが、翻て父子、孫輩葬する善事を思ひに自ら燃たる次第なり。

さて棺内に夫人の遺骨として納めし骨を見ず、又棺に接して夫れらしき者なし、故に最初に發見せし遺骨が夫人の物なりしならん。棺材は腐朽して發掘し難し故に箱棺に遺骨を納め、直に本墓寺山亦田氏家墳に移葬し同穴に終り、後日父祖二先生と同様墓墳に墳丘并に環石を作る此頃の頃は礎石を舊の如く樹つ。小糸坂舊墓跡は棺箱存在のまゝ、舊日低平に埋没し畢れり。

發掘中に左の所収あり。

一、誠軒先生ののみ孤り小糸坂に葬りし原因中の一は、此厚葬を以て大雄寺山墓域に葬らんとするに、露地面積不足す。

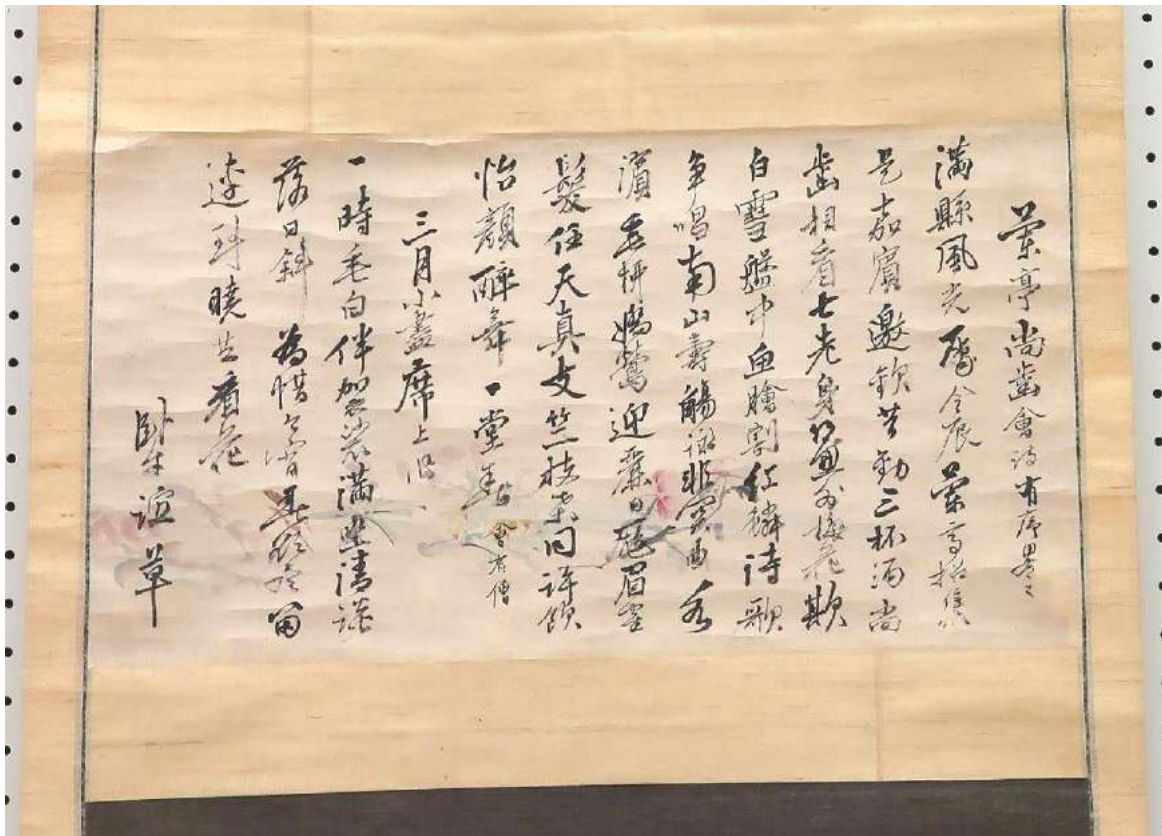
一、夫人の遺葬は北越にて茶畑に、遺骨を携へて這り橋樑勝久寺に入り佛殿なごに安置中、先生の死歿葬送等の混雑と遺骸が幼穉なりし爲め、遺忘し葬事畢りて後、又發見し、先生墳丘上に納めたるならん其棺骨の小木頭は腐朽し骨のみ残り居りしを、我等第に發見せしか。

移葬後舊墓の厚葬に劣るは、總も眞の夫妻同穴此つ一家集團は舊墓に優るべきかと、誠軒先生夫妻以て願すべしなり。

【赤田臥牛】

【赤田臥牛】

蘭亭尚齒會詩有序略之（七言絶句）



（個人蔵・掛軸）

蘭亭尚齒會詩有序略之

三月小盡席上作

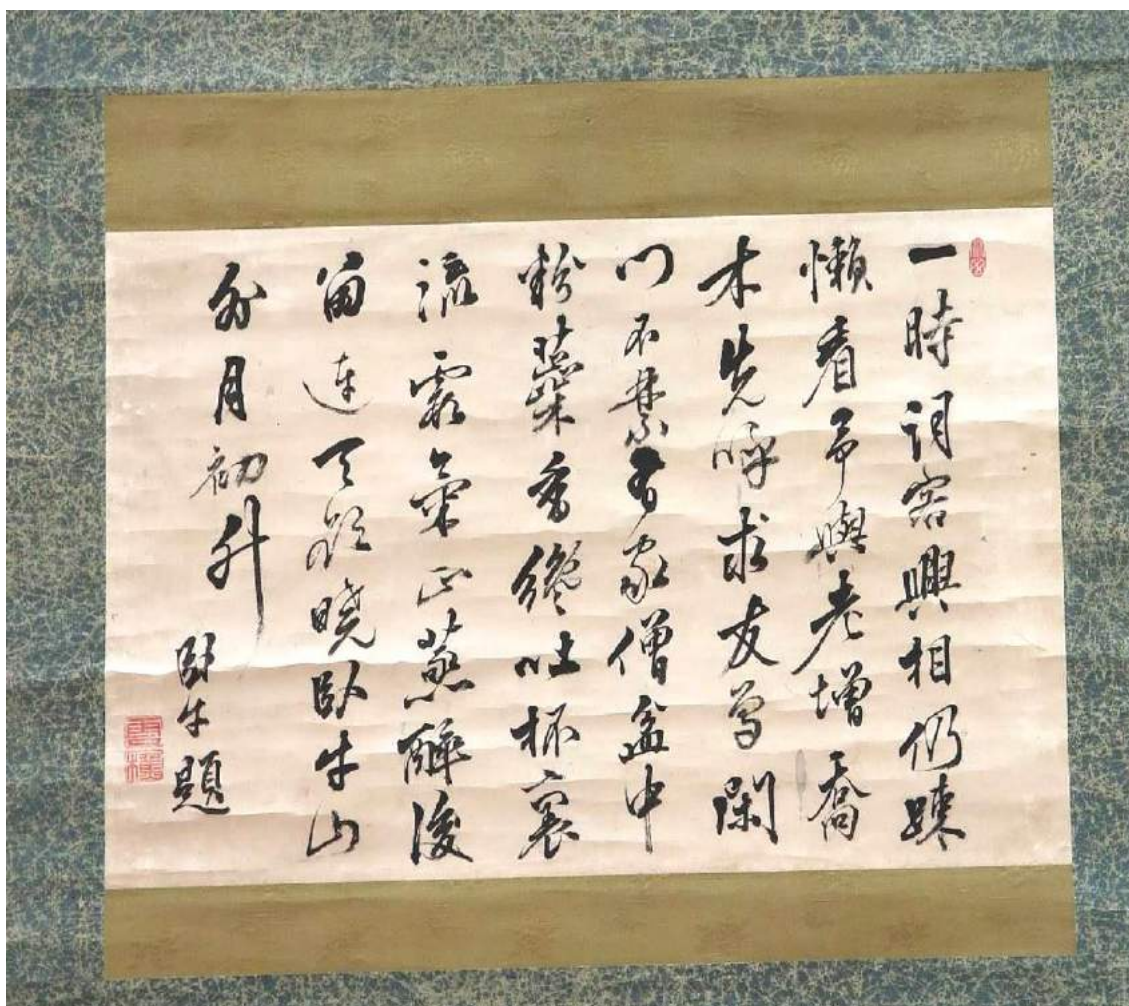
一時毛白伴袈裟 滿座清談落日斜

為惜今宵春終尽 留連到曉共看花

臥牛誼草

蘭亭の尚齒會で詠んだ詩「序もあるが省略する」とある。蘭亭は加藤步簫のこと。尚齒會（しょうしかい）とは、高年の人々が集まって宴会とともに歌を詠んだり漢詩を詠んだりする風雅の会。たいてい七人で行う慣例であった。文中三行目にも「七老身」という言葉が見られる。また、最後に「会有僧」とあることから、参加者の中には僧侶もいたらしい。三月小盡とあり、新暦では三月末から五月初。陽気の良い時期に老人が集い、酒を飲みながら歌ったり踊ったり詩を作ったり。朝 蘭亭に招かれ、翌朝 共に花を見るまで楽しんだことが書かれている。

一時詞客興相仍（七言律詩）



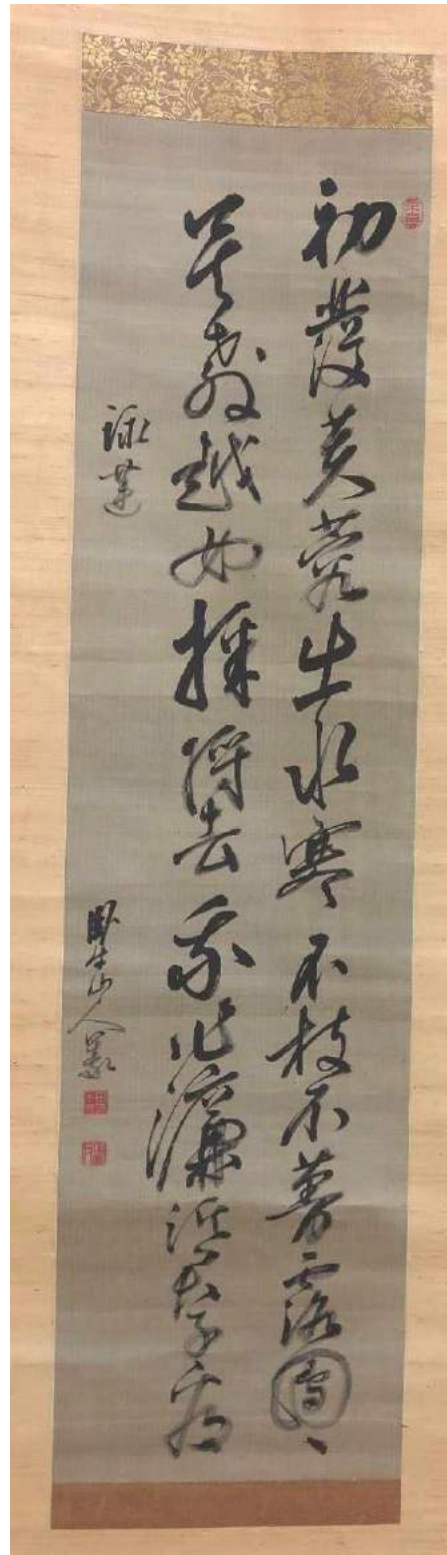
（個人蔵・掛軸）

一時詞客興相仍 疎懶看予與老增
喬木先呼求友鳥 閑門不禁看家僧
盆中粉藥香纔吐 杯裏流露氣正蒸
醉後留連天朝曉 臥牛山外月初昇

臥牛題

親しい客人が訪れた。お互いに年を取ったが変
わらず大切な友だと楽しく酒を酌み交わし、別れ
を惜しんで明け方まで到った。

添蓮（七言絶句）



（個人蔵・掛軸）

初發芙蓉出水寒 不枝不蔓露團々
莫教越女採將去 我作濂溪君子看
添蓮

臥牛山人義

周敦頤が詠んだ『愛蓮説』を引用したもの。四句目にある「濂溪」は周敦頤の号愛蓮説に、「菊は花の隠逸なる者なり、牡丹は花の富貴なる者なり、蓮は花の君子たる者なり」（菊は隠者の花、牡丹は金持ちの花、蓮は君子の花）という言葉がある。蓮が泥水の中からすっと伸びて美しい花を咲かせることから、君子の俗に流されない清廉潔白な姿になぞらえるもの。

この詩の中には更に別の引用も含まれている。三句目の「越女採」は『採蓮曲』（蓮を摘む曲）から来ている。「採蓮曲」は中国の有名な詩人李白や白居易や王昌齡らが作っているが、臥牛のこの詩に影響したのは王昌齡の詩と思われる。（詩の中に 摘取芙蓉花、莫摘芙蓉叶 とある）

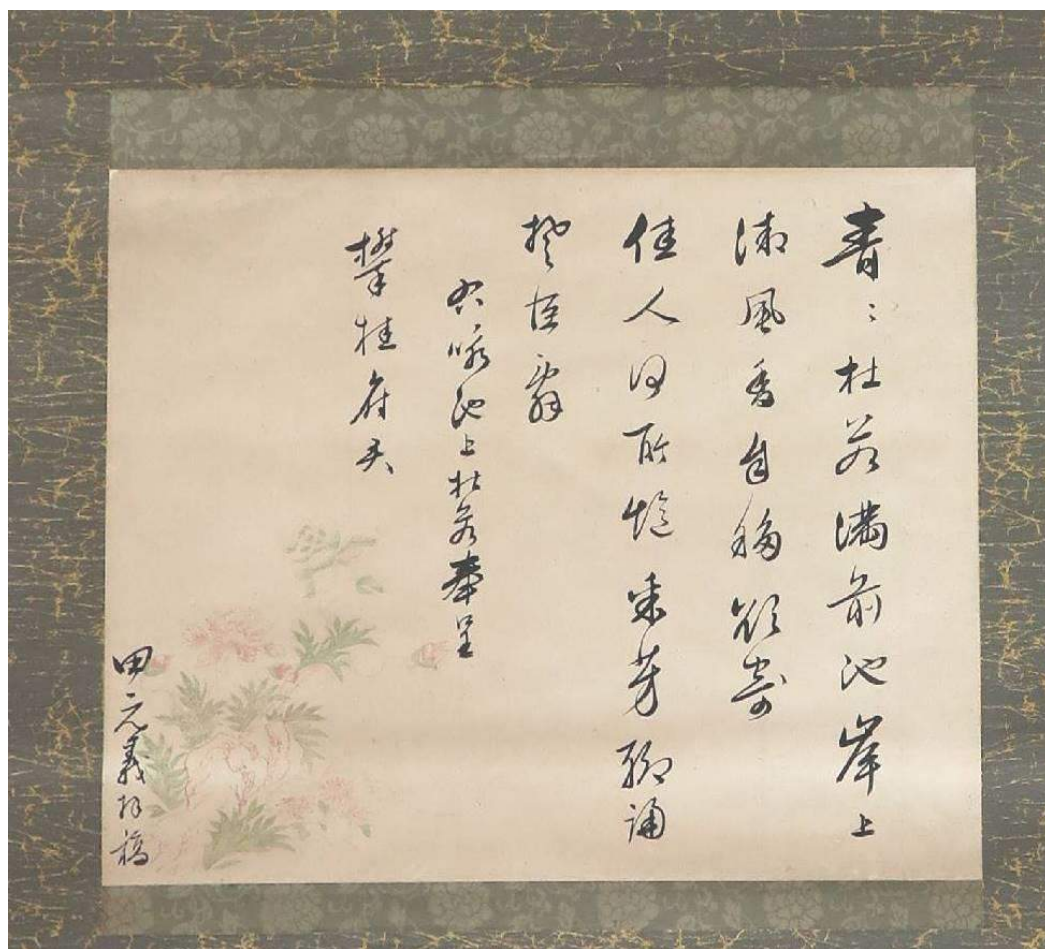
★豆知識3

漢詩は、音の高低をそろえたり似た音を使って韻をふむなど、音に関する決まりごとがたくさんあります。中国語の発音を詳しく知らない日本人が漢詩を作るというのは、大変なことだったはずですよ。

それと同時に、漢詩の中では、古い作品の表現を使ってその場面を連想させ詩の世界を広げることが非常に重要な技法としてあります。菊といえば陶淵明の隠者の暮らし、柳の枝といえば別れ というようにです。

古い故事からの引用も深い知識がなければ、なかなかできることではありません。日本人が漢詩を作る時には、どれほど本場中国の作品を知っていて、自身の作品の中に取り入れるかというのが腕の見せ所の一つでした。

青青杜若滿前池（七言絶句）



（個人蔵・掛軸）

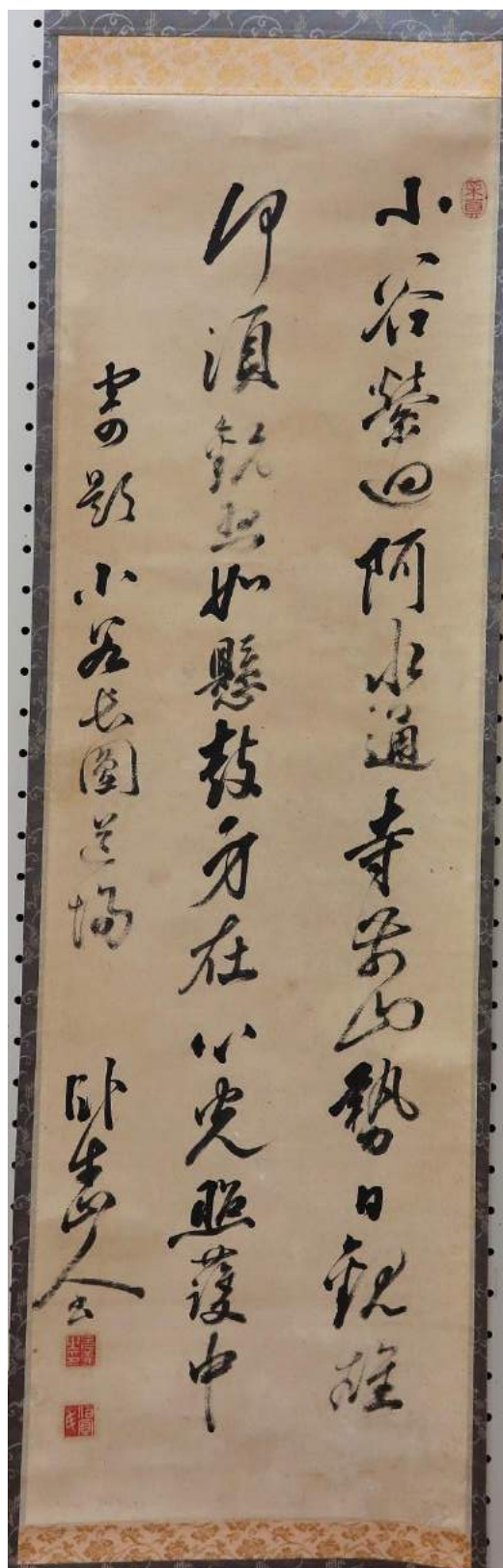
青青杜若滿前池 岸上微風香自移
欲寄佳人同所遊 采芳聊誦楚臣辭
右詠池上杜若奉呈
攀桂府君

田元義拝稿

青々としたかきつばたが庭いっぱいになり、岸を吹く微風はよい香りを運んでいる。共に遊ぼうと思って友を訪ね、香りのよい草を摘みながら少し楚辞など口ずさむ。

「楚辞」は、中国の漢の時代の書物。古い時代の歌を集めたもの。

寄題小谷長圓道場（七言絕句）

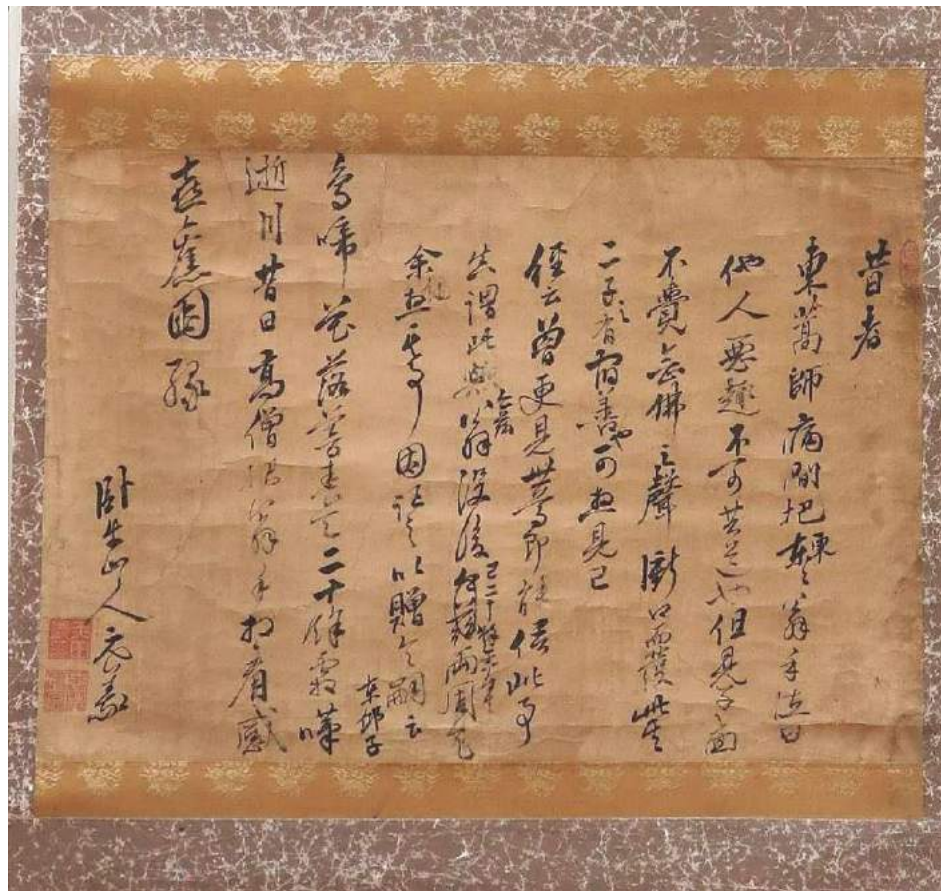


（個人蔵・掛軸）

小谷縈廻阿水通 寺前山勢日觀雄
何須如懸鼓 方在小光照中

寄題小谷長圓道場 臥牛山人書

昔者（七言絶句）

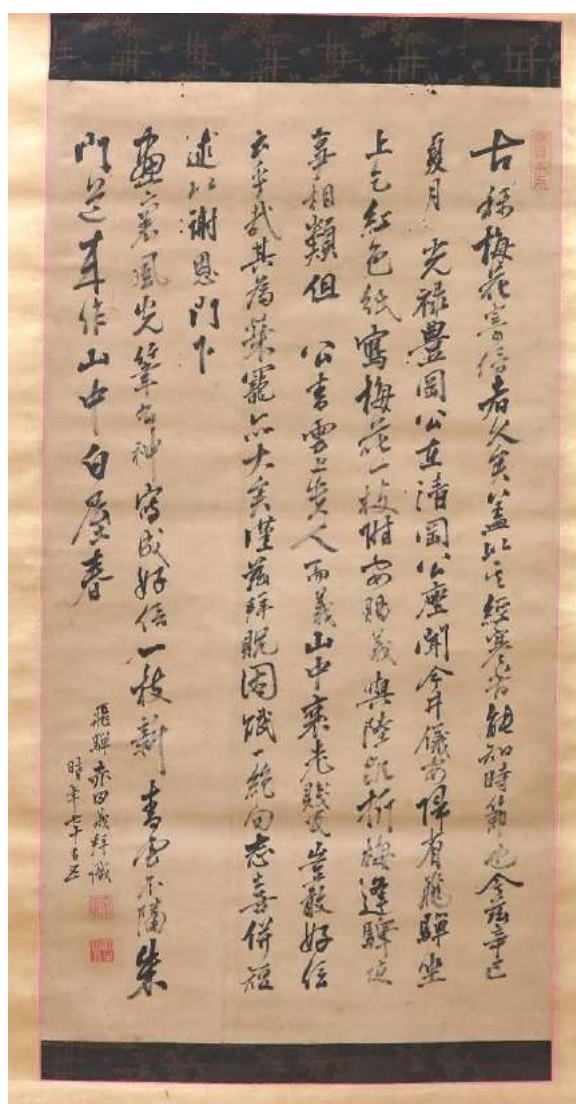


（個人蔵・掛軸）

東菴師没後二十年に息子東邱子に贈った漢詩

鳥啼花落暮春天 二十餘霜嘆逝川
昔日高僧把鉢手 相看感喜■園縁
臥牛山人元義

謹茲拜貺因賦一



(個人蔵・掛軸)

(前部分略)

謹茲拜貺因賦一絕句志喜併短述以謝恩門下

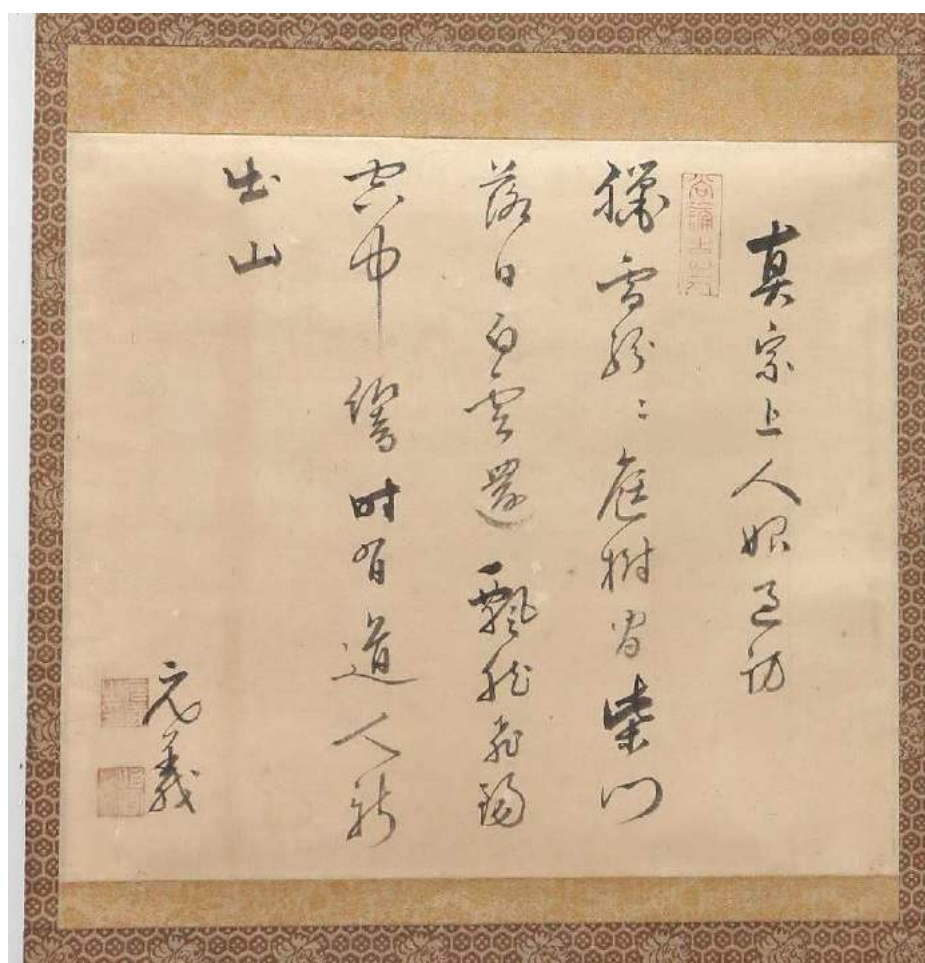
画裏風光筆有神 寫成好信一枝新

春雲不隔朱門道 來作山中白屋春

飛驒赤田義拜識

時年七十有五

真宗上人初過訪（七言絕句）

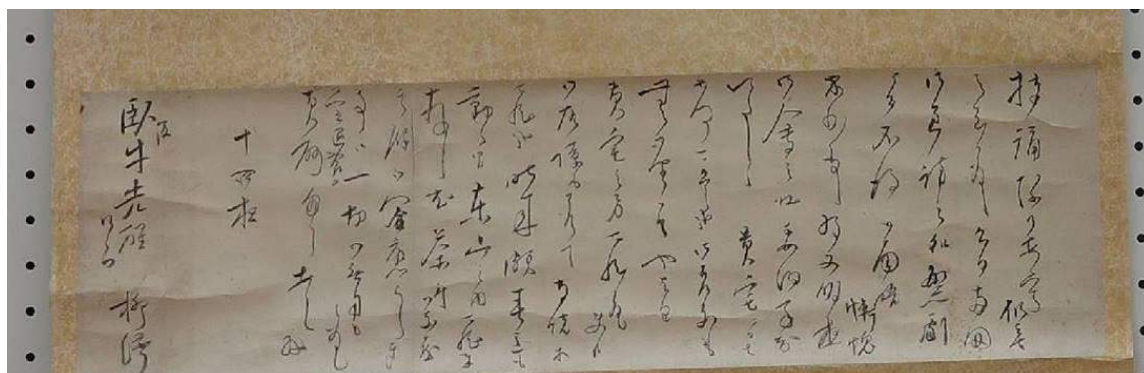


（個人蔵・掛軸）

（鷺 あるいは 鸞）

真宗上人初過訪
臘雪粉粉庭樹間 柴門落日白雲還
飄然飛陽空中鷺 時有道人新出山

臥牛⇄館柳湾（消息）



（飛騨高山まちの博物館蔵・掛軸）

棒誦 弥御安寧

欣喜

之至秦奉存候。 今日両国

御過訪之處繁劇

二て不得 御面晤

慙愧

不少奉存候。 猶又明夜

御会之状 委細承知

いたし候。 貴宅二ては

如何過有之哉。 御差支も

無御座 候ハバやはり

貴宅之方可然奉存候

夫故

御故障も可有候ハバ寺院等

可然哉。 昨年頗春意も

動候間 東山之内可然奉

存候。 尤 茶計御支度

其餘御餐饗応えらしき

事ハ一切無用と奉存候。

只今退色

忽々頓首

拝貴酬

十四夜

渡

臥牛先醒

柳湾

几下

棒誦Ⅱ一筆啓上の意か？・棒誦

熟語がないので（拝読）のくずしに見える。

過訪Ⅱ立ち寄る・訪問する

繁劇Ⅱ仕事が非常に忙しい

面晤Ⅱ面会して話す

慙愧Ⅱ深く恥じ入る

春意Ⅱ春ののどかな心持

退色Ⅱ食事をとりに帰っている

貴酬Ⅱ返事の手紙の脇付き用い語

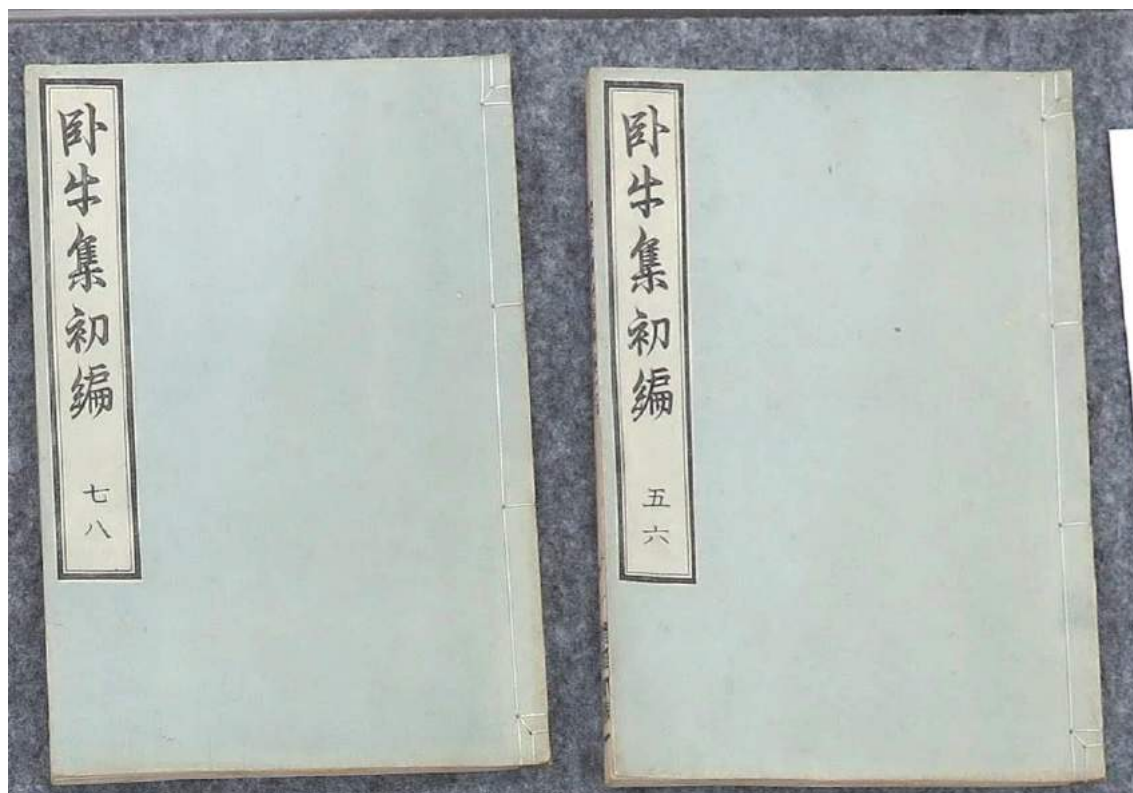
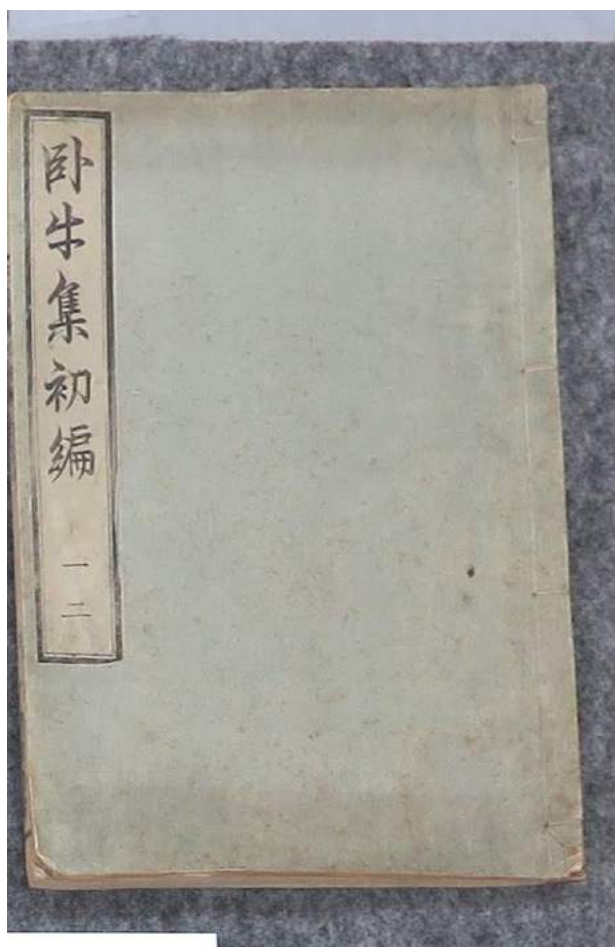
臥牛先醒Ⅱ赤田臥牛（漢学者）

飛騨籠渡し図（大森旭亭筆）



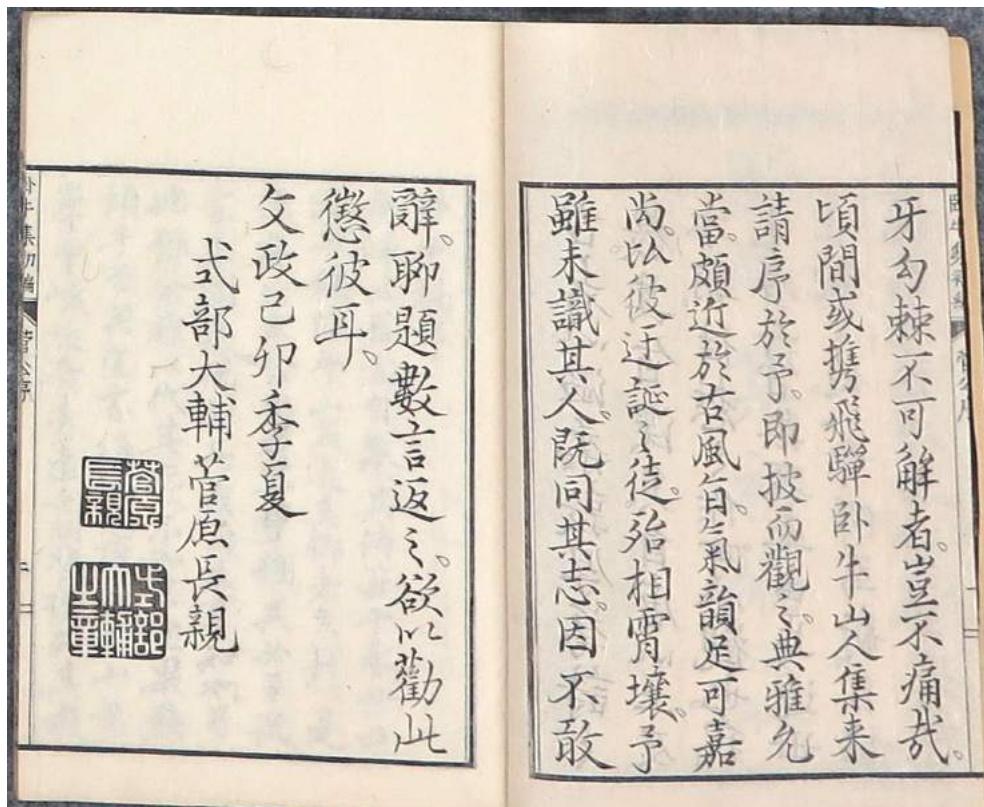
（個人蔵・掛軸）

臥牛集



(個人蔵・冊子)

卷一・二（巻頭）



（個人蔵・冊子）

江村北海が臥牛のために書いた序文。

江村北海（正徳三年（一七一三）～天明八年（一七八八））

儒者・漢詩人。『日本詩史』『日本詩選』著。

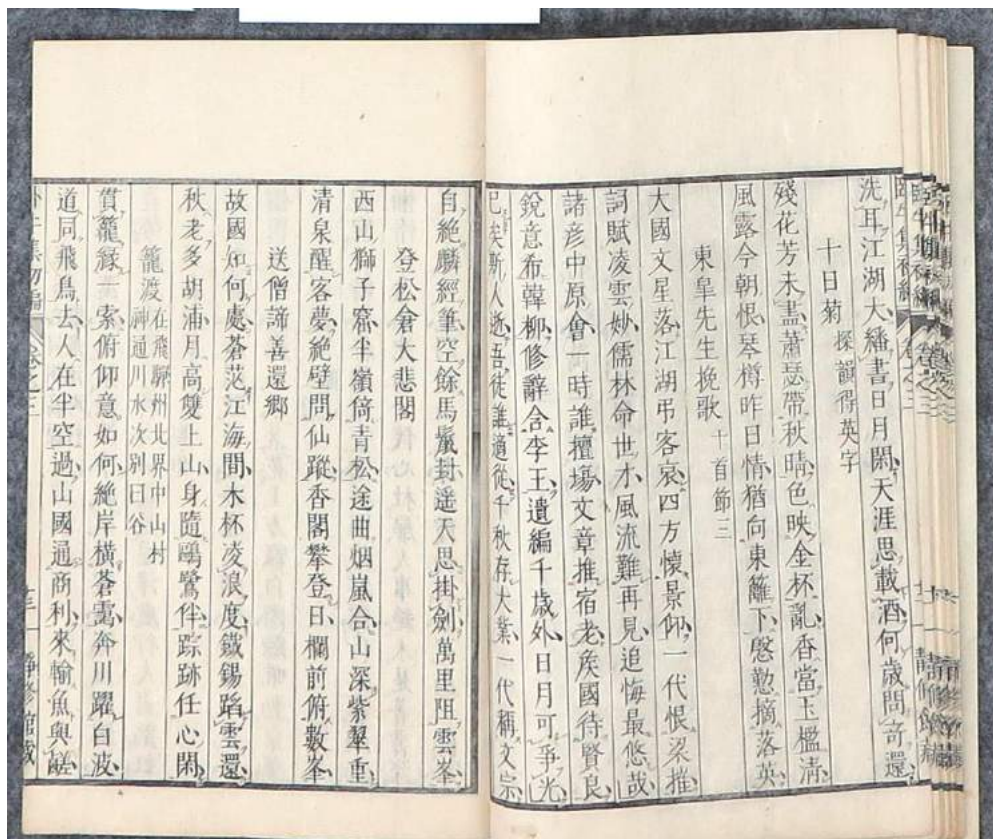
京都宮津藩儒者の江村家に養子入り。藩主に認められ重用された。藩主に付いて美濃郡上藩に居住。郡上藩を離れた後も度々教授に訪れるなど関わりが続いた。江村北海は高山を訪れようとしたが、中山七里の険しい道に恐れをなし引き返したという逸話が残っている。

北海は『日本詩史』の中で飛騨の学問の状況について次のように評している。「伊藤東涯が『飛騨には学問をする者がいない』と言っているように、飛騨という所は技芸する者はある程度いるようだが、学問については聞いたことがない」と。随分な言われようである。そのような中であって、日本全国の漢詩人の作品を集めた『日本詩選』には臥牛の漢詩が五首取り上げられており、臥牛集に序文を寄せていることから、臥牛の詩才は認めていたことをうかがうことができる。

（参考）江村北海著 『日本詩史』

巻三・巻五の二か所で飛騨の学問不振について記している。

卷三・四（卷三―十三頁）



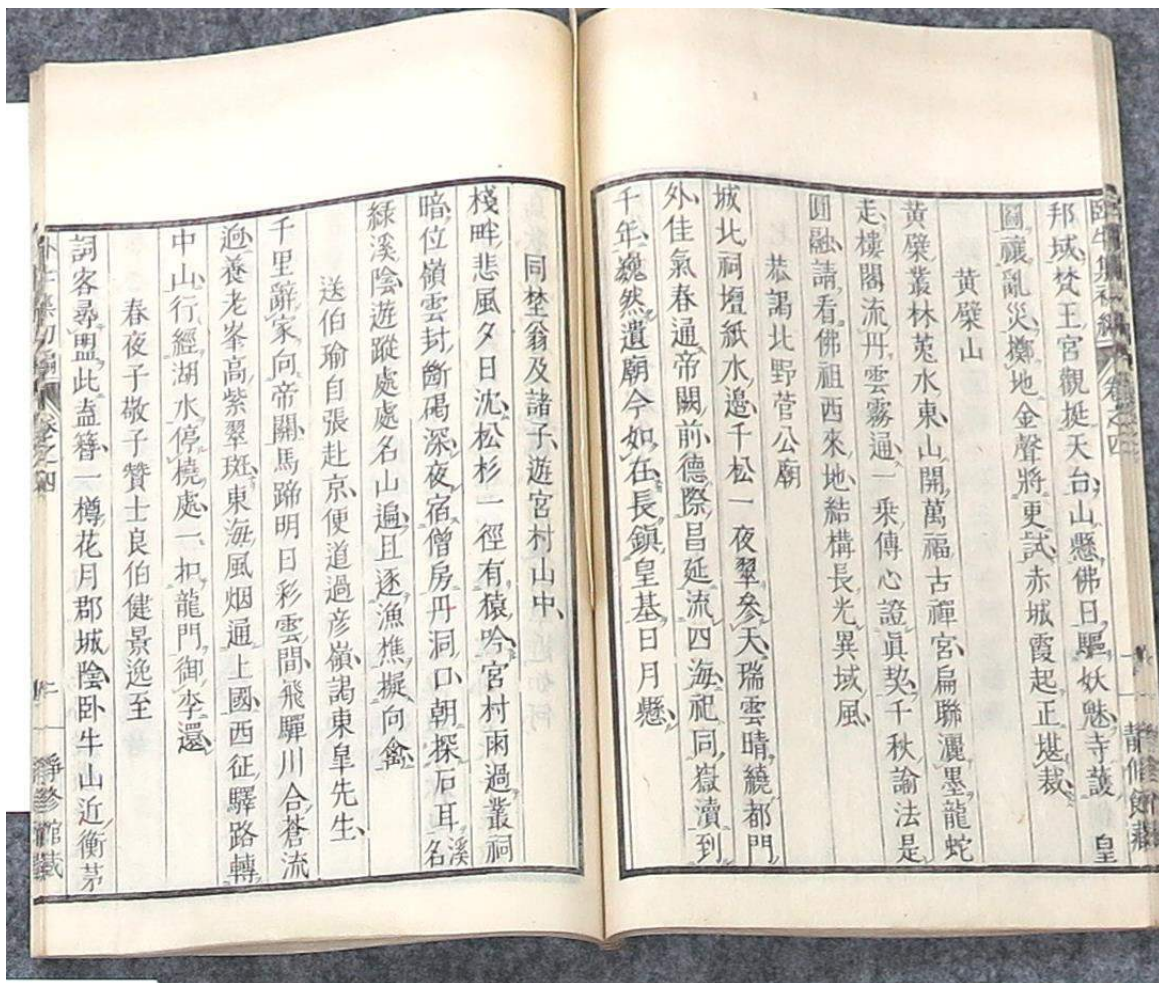
（個人蔵・冊子）

船津 籠渡し・藤橋

臥牛は、津野滄洲と共に船津籠渡し・藤橋の二図を描き、天皇に上納したと言われている。船津の籠渡しは安藤広重の六拾余州名所図会に「飛驒籠渡し」として描かれた交通の難所でありまた名所であった。

臥牛の詩に「断崖が靄の中に横たわり、遠く下の急流が白波を上げる肝を冷やす風景だ。山道は人が空中を歩いているような感じがするほど高いところに細々と通っている。飛驒の人々はここを通って商いをしているのだ」と詠っている。

卷三・四（卷四一二頁）



（個人蔵・冊子）

同楚翁及諸子 遊宮村山中

棧畔悲風夕日沈

松杉一徑有猿吟

宮村雨過叢祠暗

位嶺雲封斷謁深

夜宿僧房丹洞口

朝探石耳綠溪陰

遊蹤處處名山遍

且逐漁樵擬向禽

棧畔の悲風夕日沈む

松杉一徑猿の吟る有り

宮村雨過ぎて叢祠暗く

位嶺雲封じて断謁深し

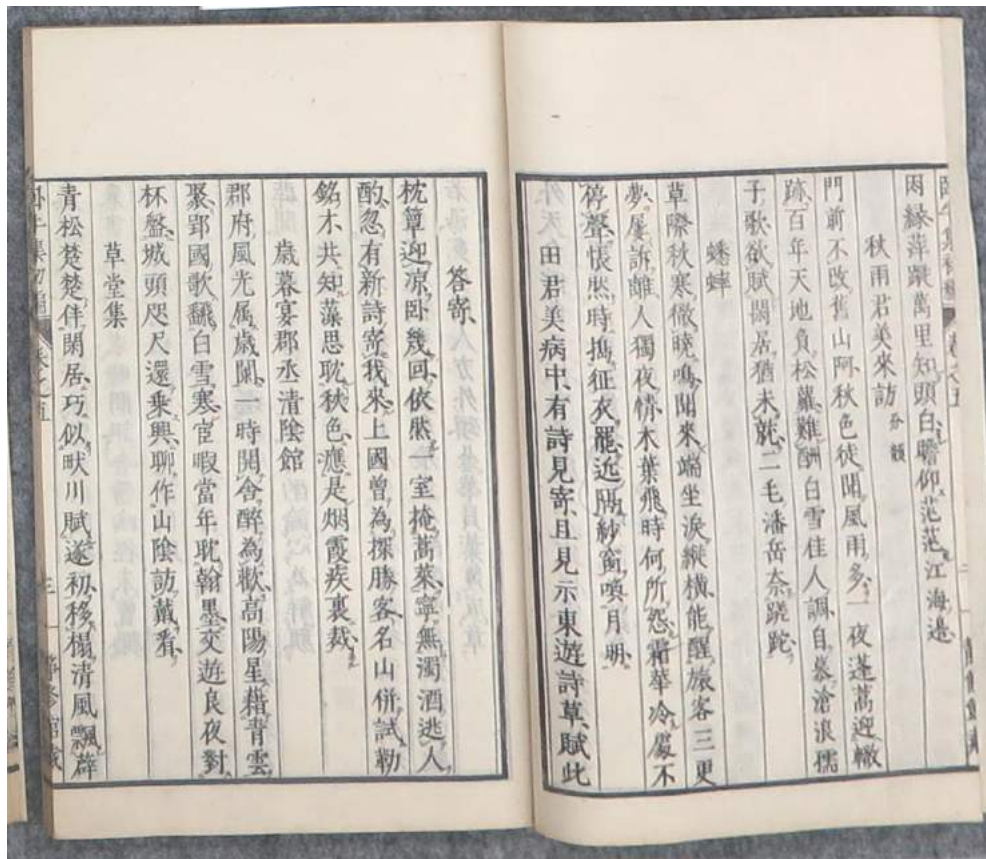
夜僧房に宿す丹洞の口

朝に石耳を採る緑溪の陰

遊蹤處處名山遍く

且漁樵を逐て向禽に擬す

卷五・六（卷五―三頁）



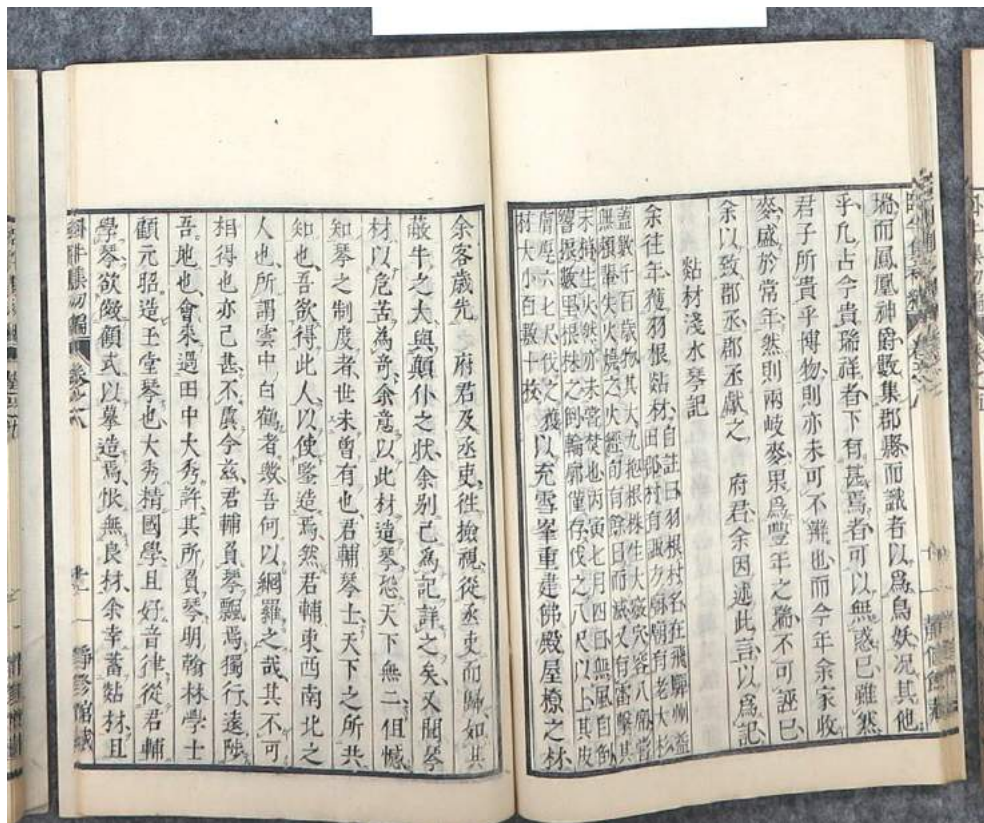
（個人蔵・冊子）

館柳湾との親交

館柳湾は、臥牛集に郡丞として度々名前が挙がり親交を伺うことができる人物である。柳湾は寛政十二年郡代として飛騨に着任した小出大助に従い、元締手代の役職で飛騨にやってきた役人である。在任は五年間。柳湾は漢詩を詠むのが得意で、『柳湾漁唱』という漢詩集を出している。この詩集には、高山のことを詠んだ漢詩が三十首あまりあり、高山の風俗を詠んだ高山竹枝がよく知られている。

小出郡代もまた臥牛に敬意を払い、講義を開かせて自らも学んだと言われている。小出郡代に代わって田口郡代が赴任した時期に教授所静修館開設を幕府に願い出て許可された。臥牛は郡代からも一目おかれる存在であったことが分かる。

卷七・八（卷八一十頁）



（個人蔵・冊子）

浅水琴の逸話

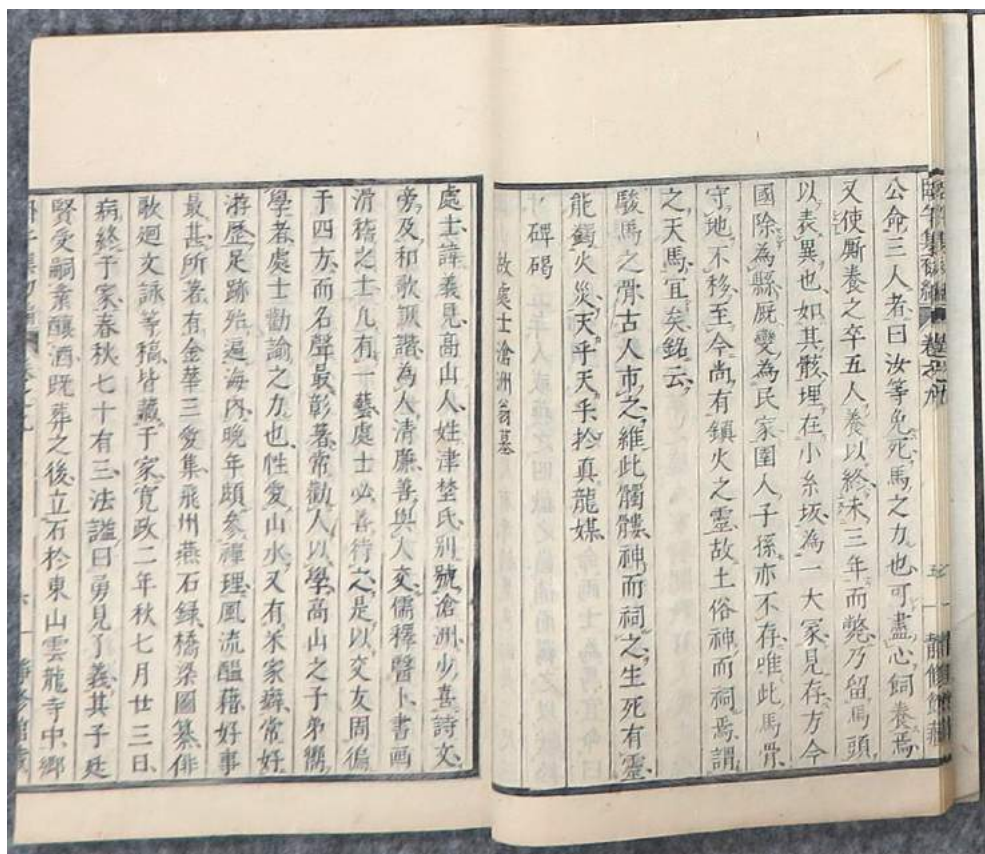
『飛騨編年史要』文化三年七月四日に、「益田郡羽根村の大杉倒れ、老嫗一人圧せられて死す、後年田中大秀此材を以て浦上玉堂に誂へて琴を製し、浅水琴と銘す。」とある。この逸話には臥牛が大きく関わっていたことが臥牛集巻八の「櫨材浅水琴記」に記されている。（櫨材は杉材のこと）

臥牛は、この大杉の材を手に入れていた。「この材を使って琴を作ってはどうかろう。」と田中大秀に語った所、大秀も大いに賛成した。臥牛は田中大秀より二十九歳年上である。大秀も静修館で学んだ一人であった。二人は話し合い名の知られた画家で琴の名人でもある浦上玉堂に琴の製作を依頼したいと思った。しかし、年中旅にある玉堂を探し出すのは「雲の中の鶴を探すより難しい」と不可能に近いと思っていたところ、偶然にも玉堂親子が飛騨に至り、赤田家に宿を請うた。

汚い旅姿に最初は気づかずだったが、傍らに琴を片時も離さぬ姿を見てもしやと尋ねたところ、玉堂本人ということが分かった。臥牛・大秀共に大喜びで歓待し、琴の製作を持ちかけた所、玉堂が喜んで引き受けてくれた。これにより、浦上玉堂監修、飛騨の工匠 中川吉兵衛の手による琴が製作された。

琴が出来上がると、萩原の現地で盛大な宴会を開き、琴を演奏して披露した。琴は浅水琴と名付けられた。

卷九・十（卷九一六頁）



（個人蔵・冊子）

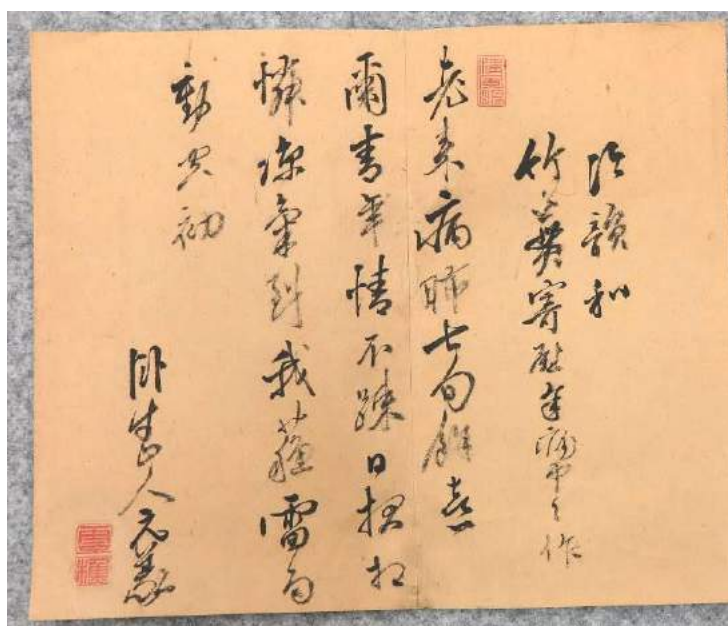
臥牛を見出した津野滄洲

津野滄洲（享保三年（一七一八）～寛政二年（一七九〇））は、高山で酒造業・養蚕業を営み、絵画・俳諧・詩文・狂歌と多彩に活躍した文人であった。

臥牛は幼少より学問の才能を持ちながら、家業を重んじる父親は学問を嫌い、また、身近に学友も師もなかった。これを惜しんだ滄洲は自らの広い交友の中から、尾張 松平君山など他所の学者への橋渡しをし、臥牛に学問の機会を開いた。

滄洲は臥牛を非常に可愛がり、臥牛の漢詩集を世に出すことを望んだが、臥牛はそれを辞退した。滄洲は思いを息子の津野延賢に託し、臥牛の死後、延賢・章斎によって臥牛集が世に出ることとなった。

次韻和（七言絕句）



（個人蔵・紙片）

次韻和

竹■寄■奉病中之作

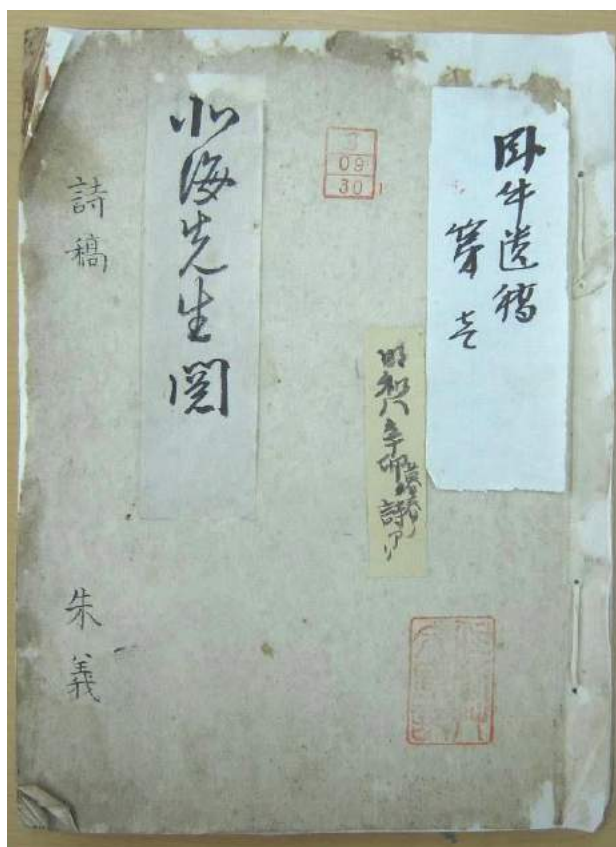
老來病肺七旬餘 喜爾青年情不疎

日夜相憐病氣到 我蘇雷雨動空初

臥牛山人元義

赤田臥牛詩文稿（遺稿）

第一



（飛騨高山まちの博物館[住 3・09-30(1)]・冊子）

「北海先生閣」とあり江村北海が添削したもの。北海は『臥牛集』に序文を寄せた人物。『日本詩史』『日本詩選』を著した儒学者で漢詩人である。

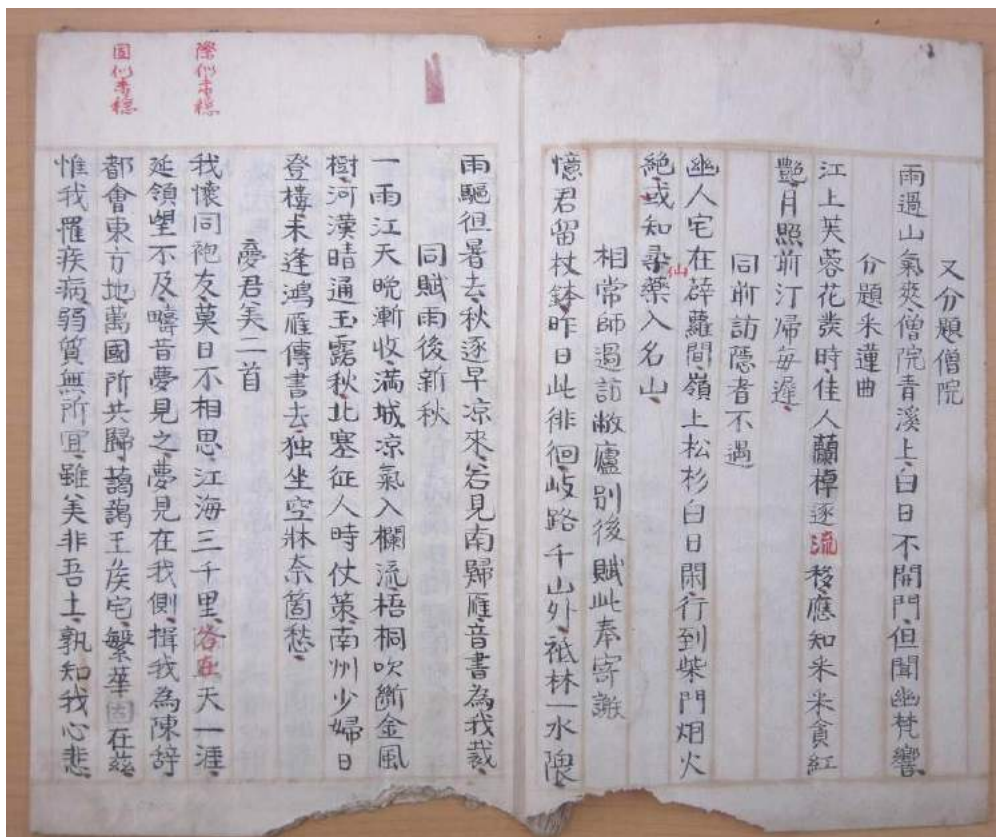
臥牛は津野滄洲の導きで尾張や関西方面の学者から教えを受ける機会を得たが、名の知れた儒学者である北海に実際に漢詩を見てもらったことが分かる史料である。

臥牛二十代の詩稿で、尾張松平君山先生、彦根龍草廬先生など臥牛が教えを受けた儒学者や、教授所の弟子の名前がたくさん出てくることから、若い時代の活発な学問行動をうかがうことができる。

尾張松平君山校閲の詩稿



松平君山は尾張の名のある儒学者。一字一字丁寧に見てくれていることが分かる。「知」は決定するの意味だから「疑」の文字をえらんだ方がよい などと、文字の選び方や表現に関するアドバースもたくさん加えられている。



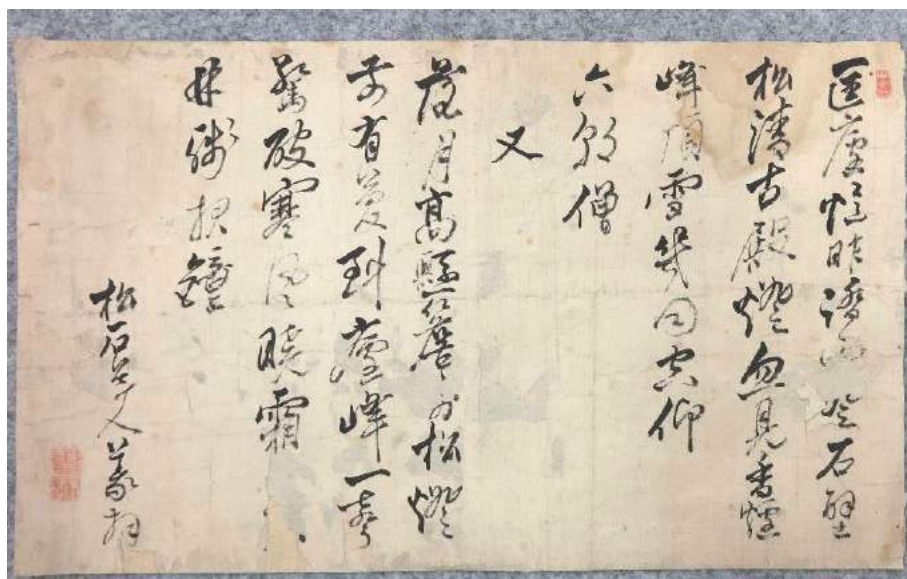
(飛騨高山まちの博物館[住 3・09-30(10)・冊子])

臥牛集卷八の「櫛材浅水琴記」の下書き



(飛騨高山まちの博物館[住 3・09-30(10)・冊子])

匡廬憶昨踏雪 ■ (七言絕句)



(個人蔵・紙片)

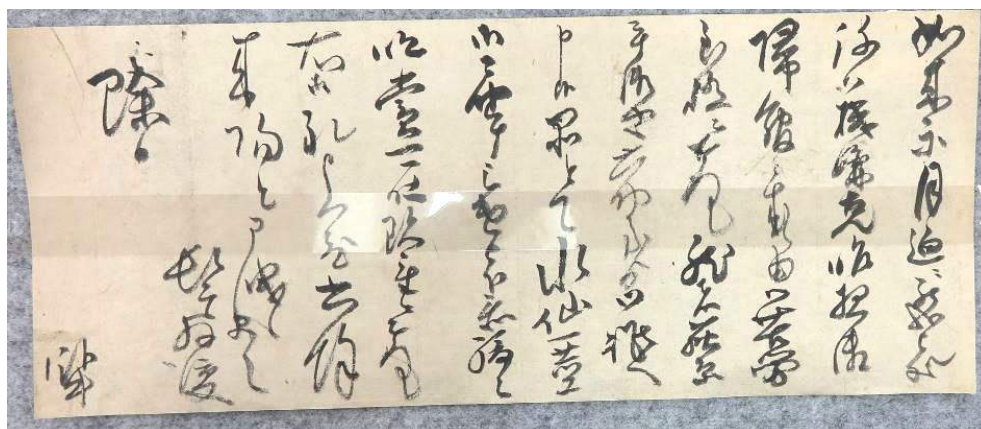
匡廬憶昨踏雪 ■ 石壁松清古殿燈
忽見香煙峰頂雪 幾回空仰六朝僧

(七言絕句)

落月高懸簷外松 燈前有藥(?)到廬峰
一聲驚破寒風曉 霜 ■ ■ 林殘夜鐘

松石道人義拜

如来示目通（書状）



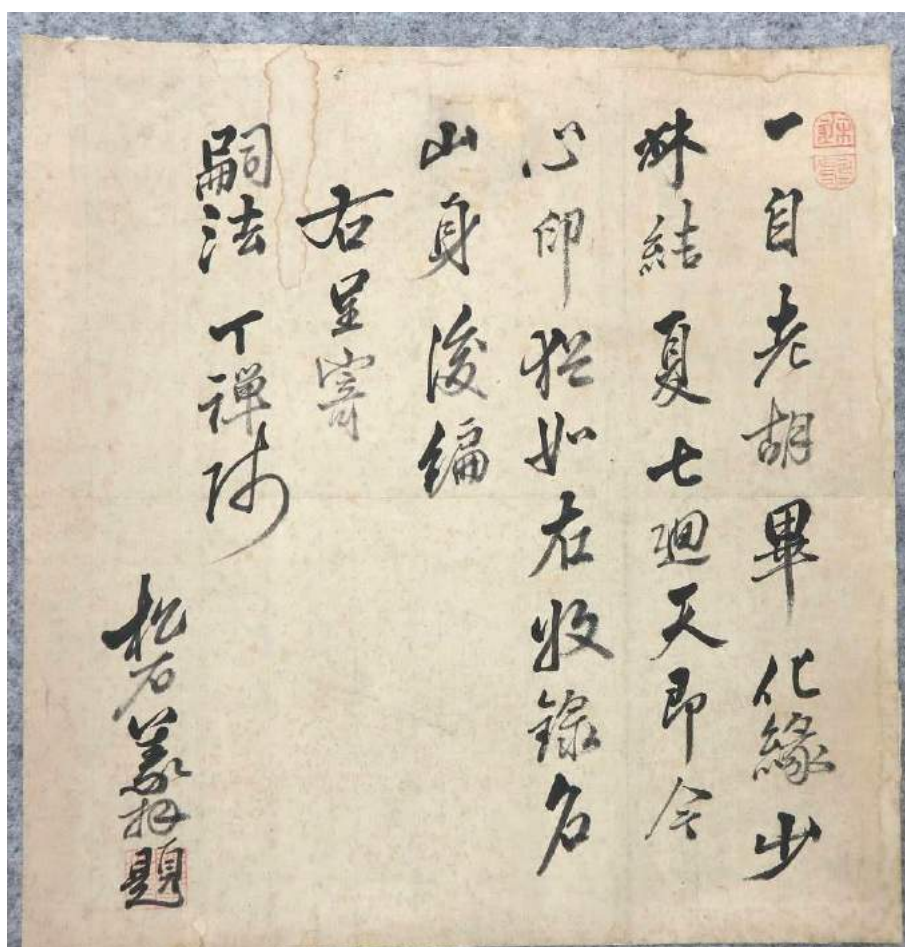
（個人蔵・文書）

除日とは大晦日。宛名は書かれていない。

冒頭「如来示目通（来示の如く目通り…ご指示の通りにお目にかかり）」とある。

大意は、他所に出向いていた人物が帰館し、役所にご機嫌いかがいで訪ねたところ、水仙一茎を頂いてありがとうございます。大切にして楽しみます。お礼申し上げます。

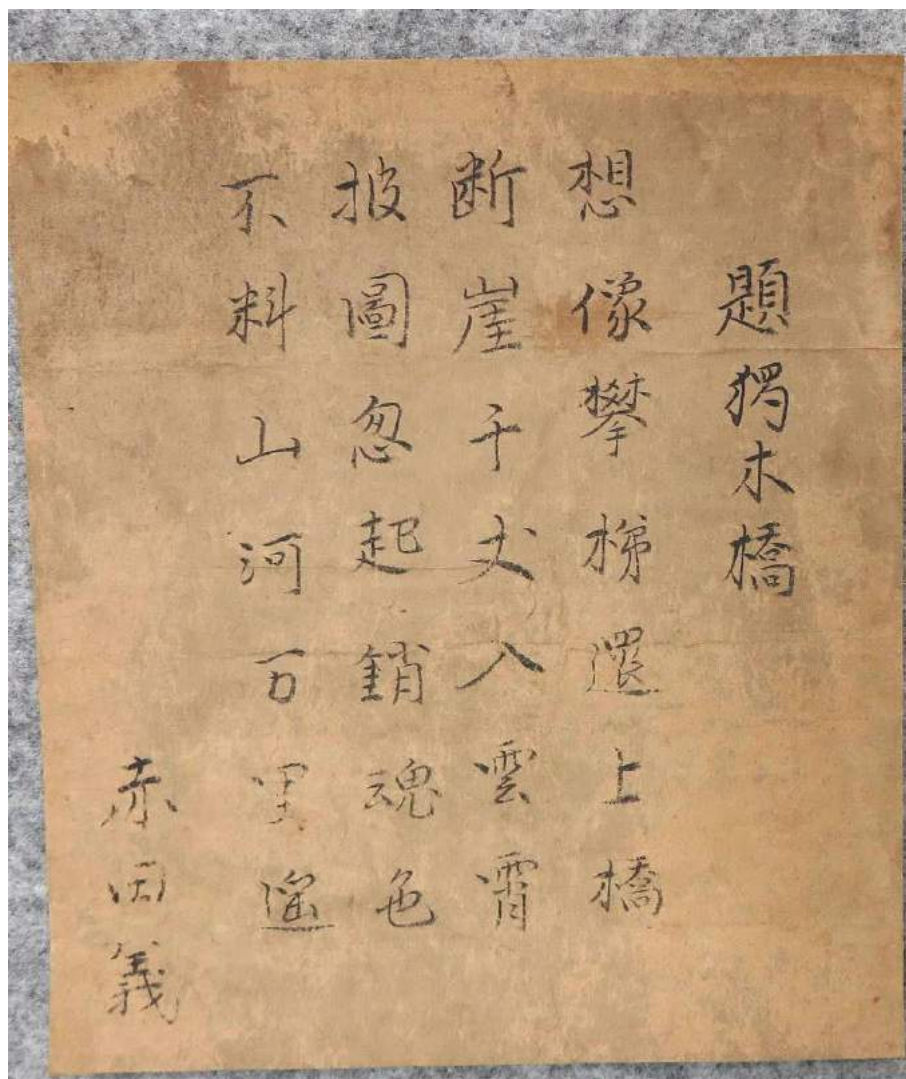
一自老胡畢化緣（七言絕句）



（個人蔵・紙片）

一自老胡畢化緣	少林結夏七迴天
即令心印猶如在	收錄名山身後編
右呈寄	
嗣法丁禪師	
松石義揮題	

題獨木橋（七言絶句）



（個人蔵・紙片）

題獨木橋

想像攀梯還上橋 斷崖千丈入雲霄
披圖忽起銷魂色 不料山河万里遙

赤田義

断崖にかかる丸木橋の画を見た驚きを詠んだ詩。

掛け軸の絵の横に漢詩が描かれていることが多いが、画讃（がさん）といい、描かれている絵のことを詠んだり、その絵を讃えて添えられる。

断崖千丈 山河万里 とあることから、中国の山水画を思わせる。

臥牛自作銘竹掛花入

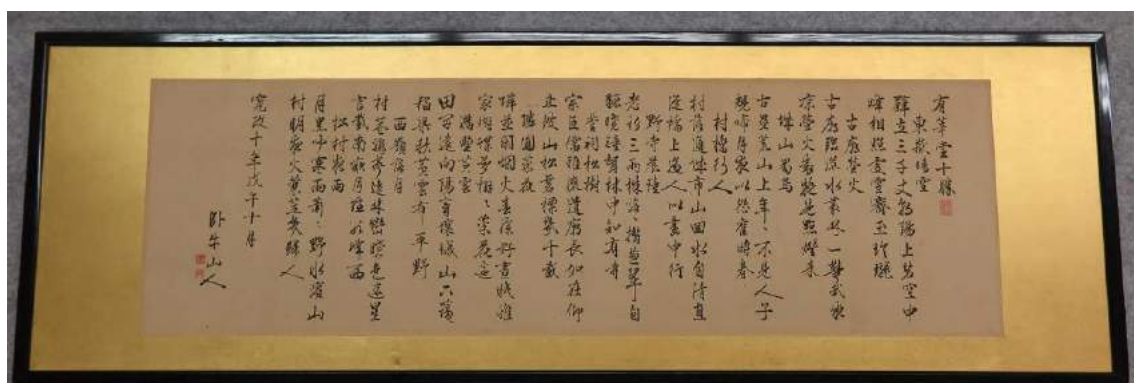


(個人蔵)

四時花御在其口

元義

三福寺十勝



(個人蔵・扁額)

有莘堂十勝 「三福寺十勝」

東嶽晴雪

壁立三千丈

中峰相照？

(玲瓏 金属や玉が輝く模様)

古廟螢火

古廟臨流水

夜涼螢人動

(哉 感嘆の意)

城山蜀鳥

古壘荒山上

子規啼月夜

(蜀鳥 ほととぎす。子規とも書く)

村橋行人

村落通城市

直從橋上過

(城市 昔の城下)

野寺晨鐘

老杉三兩株

自聽曉鐘聲

(葱翠 ねぎの緑色)

管祠松樹

宗臣儒雅流

仰止彼山松

(千載 長い年月)

(遺廟 この場合古墳のことではなく菅原道真を祭った祠。現在の堀之内宮司宅か向山。天満宮から来た神主がいたのかも知れない。その東方に老田松があり、この詩を詠んだものと思われる)

隣園菜花

隣並閑烟火

誰家蝴蝶夢

(栩々 くるくる)

満野黄稻

田開遠向陽

蕩々稻梁秋

(蕩々 広大で穏やかな)

西嶺落月

村庵鶴聲遠

星言載南畝

(林巒 林の峰／星言 星輝く様)

松村夜雨

月黒聞寒雨

山村明夜火

(蕭々 ものさみしい雨の降る様)

屏風（二曲一双）



（個人蔵）

屏風（六曲一双）



（右隻）



（左隻）

（個人蔵）

樹密（七言二句）



（個人蔵・掛軸）

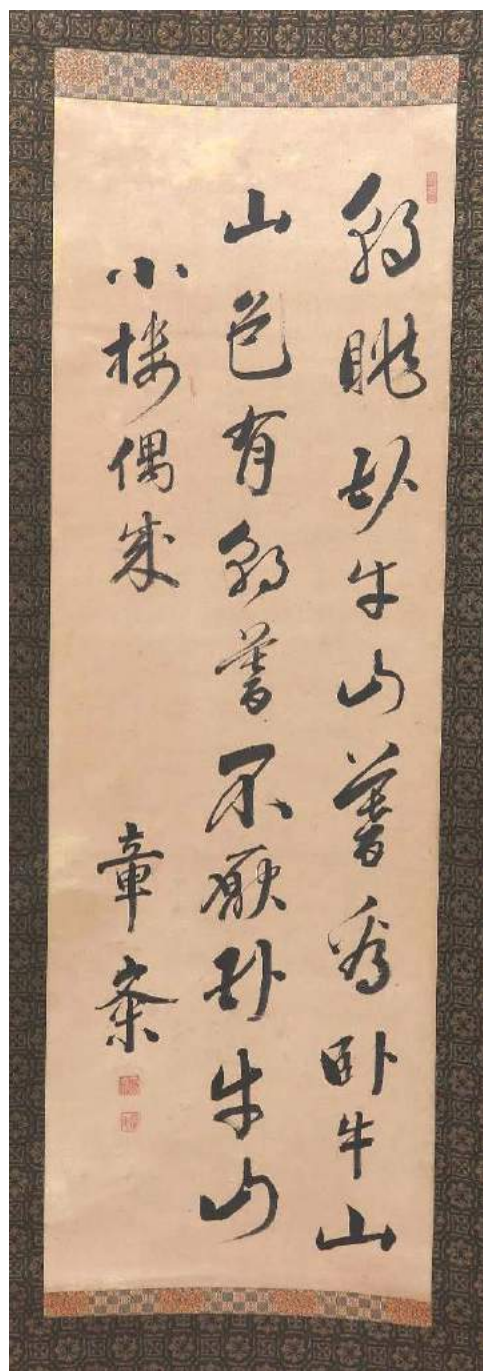
樹密鵲声啼落日
田開麦穗舞回風

軸のために七言の二句を切り出したもの。

【赤田章斎】

【赤田章斎】

小楼偶来（五言絶句）



（個人蔵・掛軸）

小楼偶成

朝眺臥牛山 暮看臥牛山

山色有朝暮 不厭臥牛山

章斎

臥牛山は城山のこと。静修館は二度の移転があっても常に城山付近にあった。詩の大意は、朝に夕に臥牛山を眺める。時々はその姿を変え、飽きることがない。

足立某のために章斎が画とともに書いた「帰去来の辞」



(個人蔵・掛軸)

陶淵明「帰去来の辞」

「帰りなんいざ 田園まさにあれなんとす なんぞ帰らざる」
 (さあ帰ろう。故郷の田園は荒れようとしている。帰らずにおられようか)

誰もが学生時代に古典で学んだであろう、昔から日本人に非常に愛された作品の一つ。有名な詩人、李白・杜甫。日本人はどちらを好むか？天才肌で楽天的な李白よりも、苦勞人の杜甫を日本人は好むようである。

江戸時代の日本人が作った漢詩にも杜甫の作風をまねたものが多い。同じく、静かで慎ましい隠遁生活は日本人の心をつかみ、陶淵明も人気が高い。臥牛の漢詩の中にも陶淵明の作品の語句を引用したものが見られる。

「帰りなんいざ、田園將に蕪れなんとす… 歸去来」

歸去来兮辞の本文は四段からなる。一段目は、官を辞して家に帰る決意を述べ、はやる心で帰路に赴く様を描く。彭沢から故郷の柴桑までは凡そ百里、陶淵明は長江を船で遡った。なお、「歸去来兮」を「かへりなんいざ」と訓読したのは菅原道真である。以後日本の訓読の中で定着した。

（歸去来兮辭）

歸去来兮

歸去来兮（かへりなん いざ）

田園將蕪胡不歸

田園 將に蕪れなんとす 胡（なん）ぞ歸らざる

既自以心爲形役

既に自ら心を以て形の役と爲す

奚惆悵而獨悲

奚（なん）ぞ惆悵して獨り悲しむ

悟已往之不諫

已往の諫めざるを悟り

知來者之可追

來者の追ふ可きを知る

實迷途其未遠

實に途に迷ふこと 其れ未だ遠からずして

覺今是而昨非

覺る 今は是にして 昨は非なるを

舟遙遙以輕

舟は遙遙として 以て輕し

風飄飄而吹衣

風は飄飄として 衣を吹く

問征夫以前路

征夫に問ふに 前路を以ってし

恨晨光之熹微

晨光の熹微なるを恨む

— さあ帰ろう、田園が荒れようとしている、いままで生活のために心を犠牲にしてきたが、もうくよくよと悲しんでいる場合ではない、今までは間違っていたのだ、これからは自分のために未来を生きよう、道に迷ってもそう遠くは離れていない、— 船はゆらゆらとして軽く、風はひょうひょうと衣を吹く、船頭にこれからの行き先を問い、朝の光のおぼろげなのを恨む

二段目は、家に帰った喜びと、家でのくつろぎの一時を述べる。家人に迎えられ、好きな酒をのんびりと飲める喜びが語られている。

乃瞻衡宇	乃ち 衡宇を瞻（あふぎ）み
載欣載奔	載ち欣び 載ち奔る
僮僕歡迎	僮僕 歡迎迎へ
稚子候門	稚子 門に候（ま）つ
三逕就荒	三逕は荒に就（つ）くも
松菊猶存	松菊は猶ほも存す
攜幼入室	幼を攜へ 室に入れば
有酒盈樽	酒有りて 樽に盈つ
引壺觴以自酌	壺觴を引きて 以て自ら酌し
眄庭柯以怡顏	庭柯を眄（なが）めて 以て顔を怡（よろこば）す
倚南窗以寄傲	南窗に倚りて 以て傲を寄せ
審容膝之易安	膝を容るるの安んじ易きを審らかにす
園日涉以成趣	園は日々に涉って 以て趣を成し
門雖設而常關	門は設くと雖も 常に關（とざ）す
策扶老以流憩	扶老（つゑ）を策（つゑつ）き 以て 流憩し
時矯首而游觀	時に首を矯げて游觀す
雲無心以出岫	雲無心にして 以て岫を出で
鳥倦飛而知還	鳥 飛ぶに倦みて 還るを知る
景翳翳以將入	景 翳翳として 以て將に入らんとし
撫孤松而盤桓	孤松を撫でて盤桓とす

― やつと我が家が見えたので、小走りに向かっていくと、召使いたちが出迎え、幼い子が門で待っている、三本の小道は荒れてしまったが、松菊はまだ元気だ、

― 幼子を抱きかかえて部屋に入れば、酒の用意ができている、壺觴を引き寄せて手酌し、庭を眺めては顔をほころばす、南の窓に寄りかかって楽しい気分を満喫し、狭いながらも居心地の良さを感じる

― 庭は日ごとに趣を増し、門は常に閉ざしたままだ、杖をついて散歩し、時に首をもたげてあたりを眺める、雲は無心に山裾からわき上がり、鳥はねぐらに帰ろうとする、日は次第に暗くなってきたが、一本松をなでつつ去りがたい気持ちになる

三段目は、もう一度「歸去來兮」と決意を述べた後で、田園で暮らす喜びを描く。二段目が秋であったのに対し、これは春を歌う。おそらくは、歸郷の翌年に作ったのであろう。

歸去來兮

請息交以絶遊

世與我以相遺

復駕言兮焉求

悅親戚之情話

樂琴書以消憂

農人告余以春及

將有事於西疇

或命巾車

或棹孤舟

既窈窕以尋壑

亦崎嶇而經丘

木欣欣以向榮

歸去來兮（かへりなんいざ）

交りを息（や）め 以て遊びを絶たんことを請ふ

世 我と 以て相ひ遺（わす）れ

復た駕して 言（ここ）に焉（いづく）にか求めん

親戚の情話を悦び、

琴書を楽しみ 以て憂ひを消す

農人 余に告ぐるに春の及べるを以てし

將に西疇に於いて 事有らんとす

或は巾車に命じ

或は孤舟に棹さす

既に窈窕として 以て壑（たに）を尋ね

亦た崎嶇として丘を經（ふ）

木は欣欣として 以て榮に向かひ

泉涓涓而始流
羨萬物之得時
感吾生之行休

泉は涓涓として 始めて流る
萬物の 時を得たるを羨み
吾が生の 行くゆく休するを感ず

―さあ帰ろう、世間との交際をやめよう、自分と世間とは相容れない、なんで再び官吏の生活に戻することを考えようか。
―親戚のうわさを喜んで聞き、琴書を楽しんで屈託がない、農夫が春の来たことを告げ、西の畑で農作業を始めた、車に乗ったり、船を操ったりして、深々とした谷を訪ねたり、険しい丘に登ったりする、木々は生い茂り。泉はほとばしる、万物が時を得て栄える中、私は自分の人生が終わりに近づいていくのを感じるのだ。

四段目は、自然の恵みに対比して人の命のはかないことを、一種の無常観を以て述べる。陶淵明の人生観がよく現れている部分である。

已矣乎

寓形宇内復幾時

曷不委心任去留

胡爲遑遑欲何之

富貴非吾願

帝鄉不可期

懷良辰以孤往

或植杖而耘子

登東皋以舒嘯

臨清流而賦詩

聊乘化以歸盡

樂夫天命復奚疑

已矣乎（やんぬるかな）

形を宇内に寓すること復た幾時ぞ

曷ぞ心を委ねて去留を任せざる

胡爲れぞ遑遑として 何にか之かんと欲す

富貴は吾が願ひに非ず

帝郷は期す可からず

良辰を懷ひて 以て孤り往き、

或は杖を植（た）てて耘子す

東皋に登り 以て舒（おもむろ）に嘯き

清流に臨みて 詩を賦す

聊（ねが）はくは化に乗じて 以て盡くるに歸し

夫の天命を樂しめば 復た奚をか疑はん

―致し方のないことだ、人間はいつまでも生きていられるわけではない、どうして心を成り行きに任せないのだ、また何故あ
たふたとして、どこへ行こうというのだ、

―富貴は自分の望むところではない、かといって仙人になれるわけでもない、よい日を選んで散歩し、杖をたてて草刈りをし
たり、土を盛ったりする、

―また東の丘に登っては静かにうそぶき、清流に臨んでは詩を賦す、願わくはこのまま自然の変化に乗じて死んでいきたい、
天命を甘受して楽しむのであれば、何のためらいがあらうものか

金鱗陽数具（五言絶句）



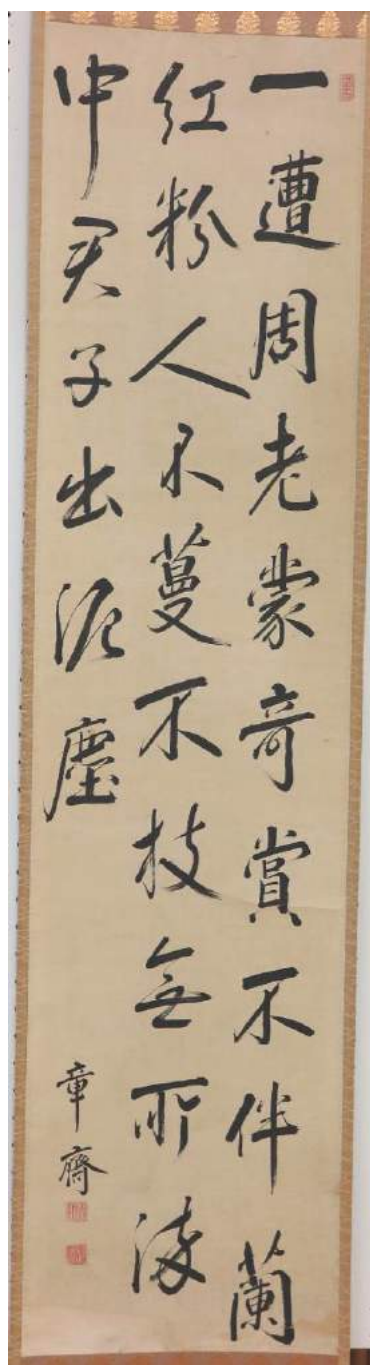
（個人蔵・掛軸）

金鱗陽数具 水旋比隣希
一躍龍門上 恐乘雲雨飛
章斎題

「登龍門」という言葉の元になった故事。登龍門の「龍門」とは、中国の黄河上流にある龍門山を切り開いてできた急流のことである。その龍門を登りきった鯉がいたならば、龍になるといふ言い伝えがあった。この言い伝えから、難関を越えて出世することを「登龍門」と言うようになった。

（中国『後漢書 李膺伝（りようでん）』）

一遭周老蒙奇



(個人蔵・掛軸)

一遭周老蒙奇賞不伴蘭紅粉人
不蔓不枝無所染中君子出泥塵

章齋

「不蔓不枝」は、臥牛の「添蓮」の詩にも同じ表現が使われている。これは、周敦頤が詠んだ『愛蓮説』を引用したもの。蔓も枝もないということから、君子が俗世の泥塵の中にあっても染まらず清らかであることを表している。

賀 吉邨翁兼謝惠書画（七言絶句）



（個人蔵・掛軸）

八旬倂窓墨痕鮮 鈔画并題雀躍篇
不識壽星有私照 因君願獲字高年
章斎

賀

吉邨翁兼謝惠書画

惟天地萬物父母



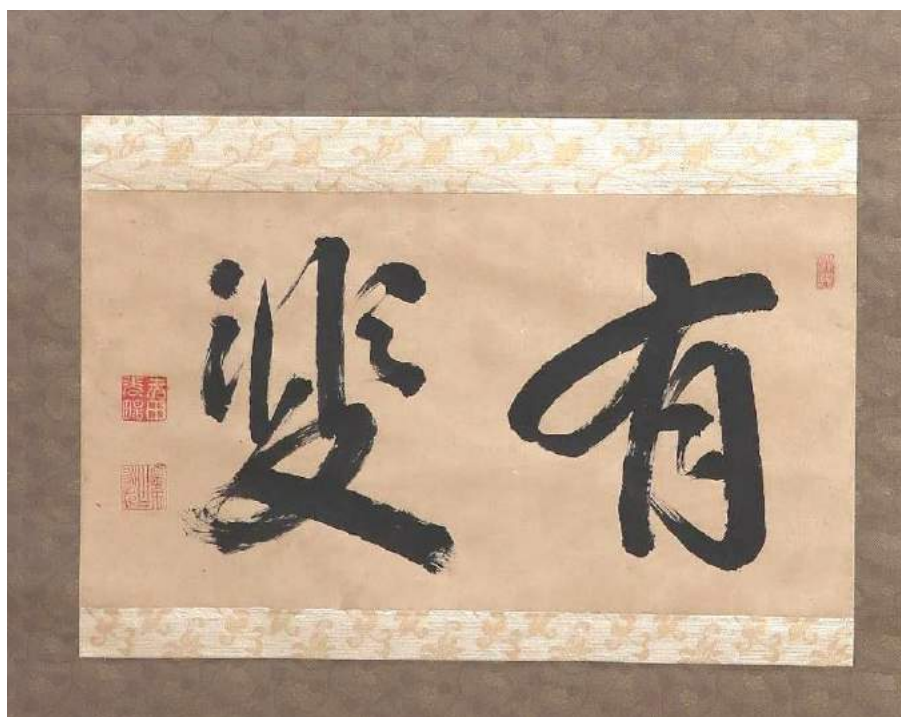
(個人蔵・掛軸)

惟天地萬物父母
惟人萬物之靈

暢書

『尚書』（政治史・政教を記した中国最古の歴史書）の言葉。

大意は、天地は万物を生み出す父母であり、人は万物の不思議を司る者である。



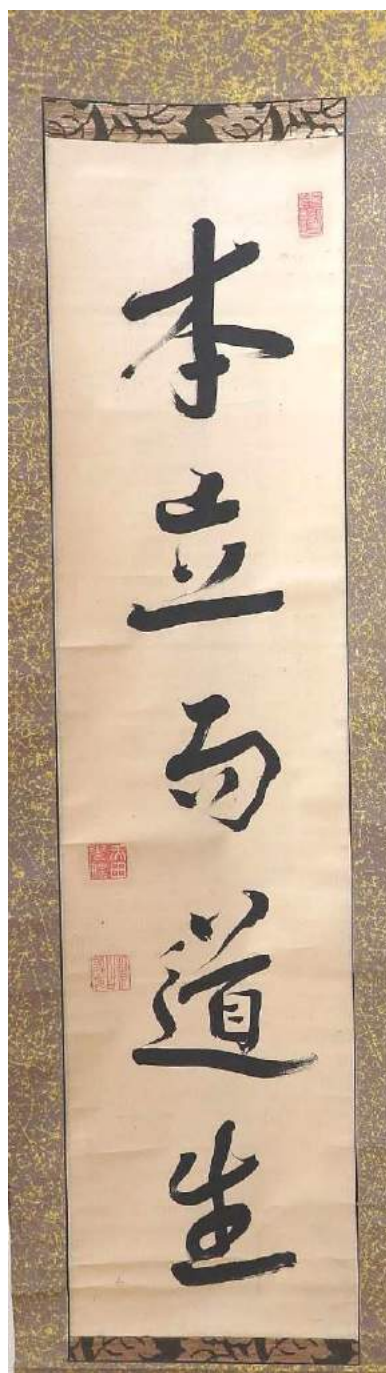
(個人蔵・掛軸)

竹の図



(個人蔵・掛軸)

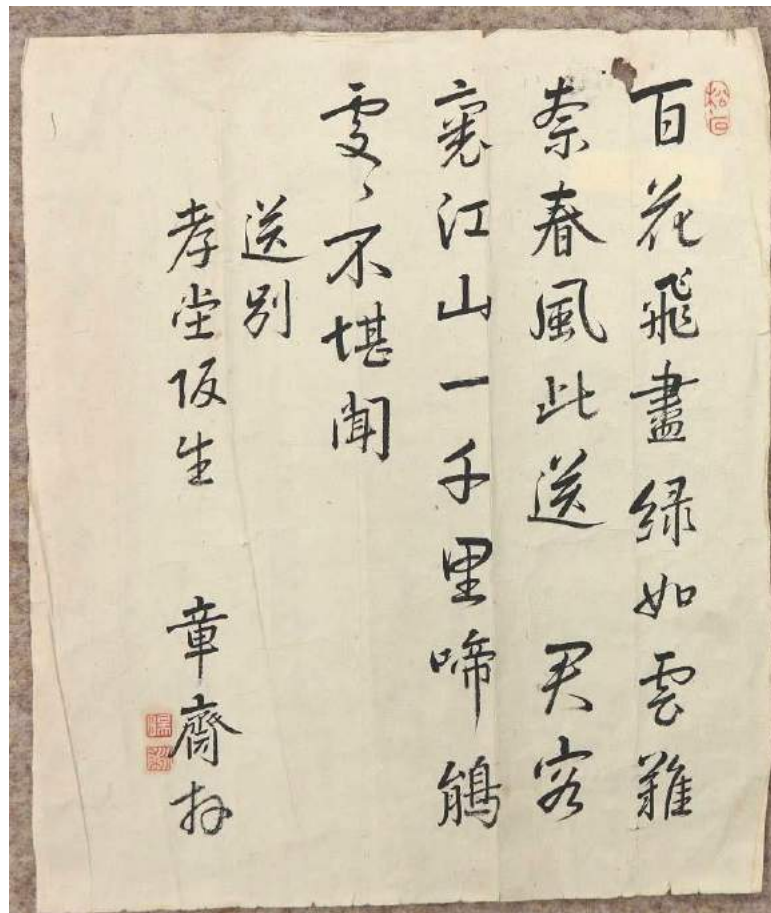
本立而道生



(個人蔵・掛軸)

4 3

送別 孝堂坂生（七言絶句）



（個人蔵・紙片）

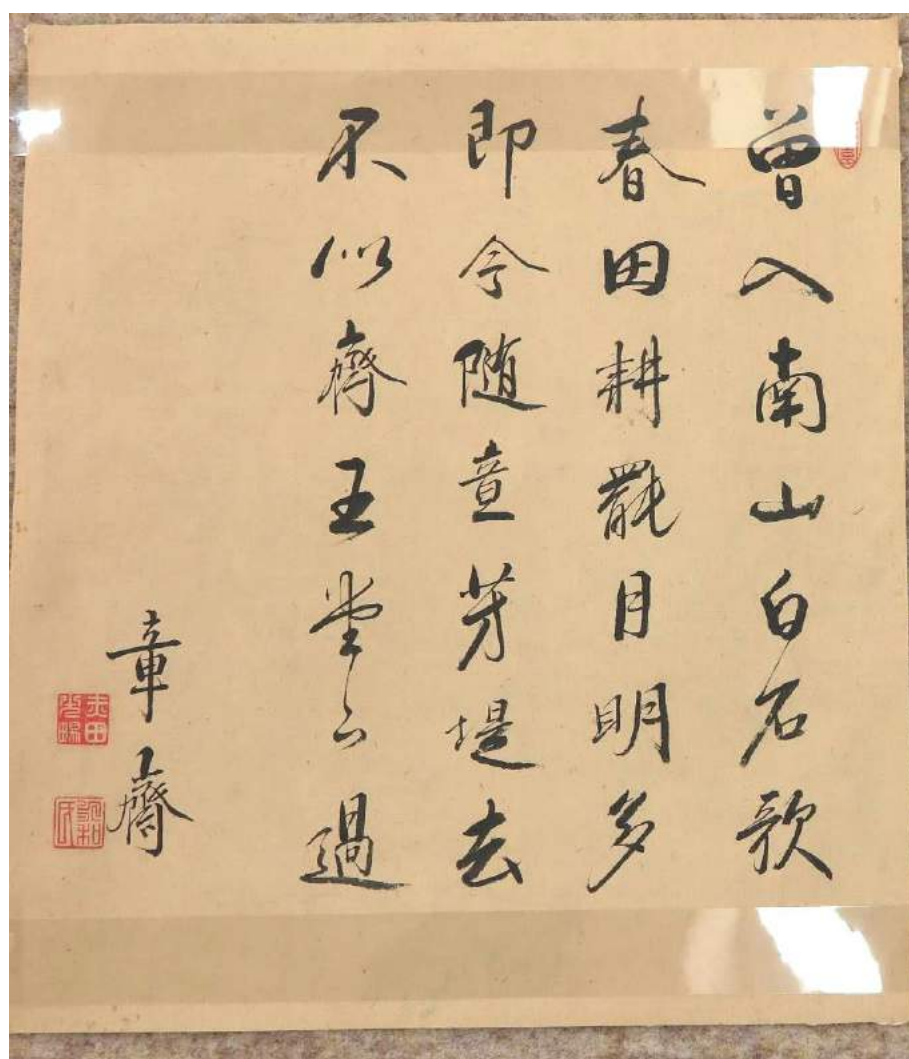
百花飛盡緑如雲 難奈春風此送君
客裏江山一千里 啼鵑處々不堪聞
送別
孝堂坂生

章斎拝

孝堂坂生は阪田五貳。高山の俳人で静修館の門人でもあった。三十三歳で没。

春の日にはるか遠く旅立つ人を送る悲しみを詠っている。

曾入南山白石歌（七言絶句）



（個人蔵・紙片）

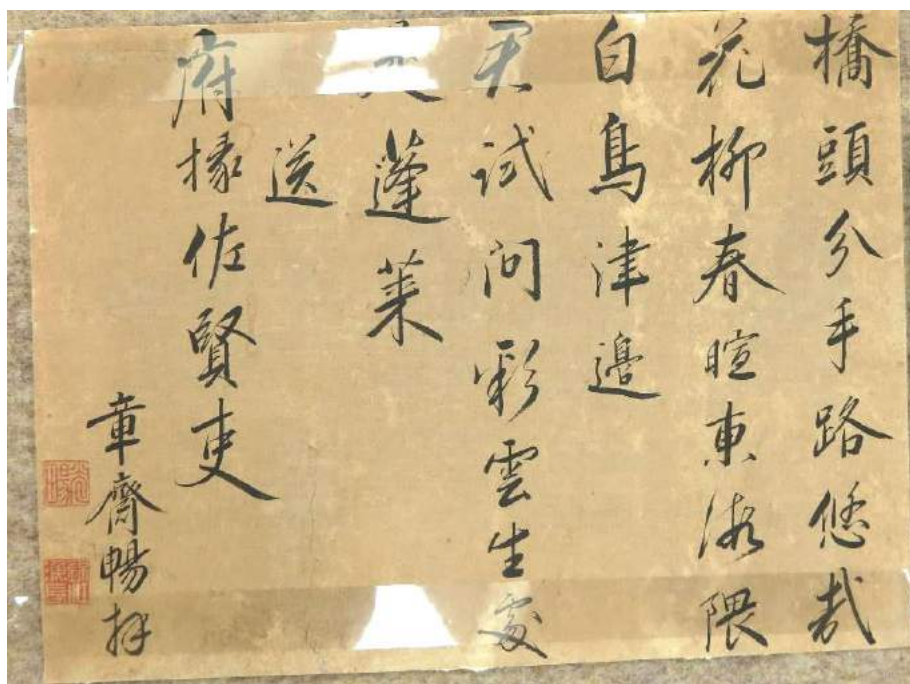
曾入南山白石歌 春田耕罷月明多
即今随意芳堤去 不以齊王堂下過
章斎

「南山白石歌」の故事に因んだ詩。身分の低い兵士だった男が牛の角をたたきながら「南山燦燦 白石爛爛」と歌い、齊の桓公との問答を経てやがて取り立てられて地位を得た逸話。

漢詩を作る手法として、中国の故事を引用することが多い。この漢詩の中では、「南山白石歌」「齊王堂下過」という部分である。引用した言葉は、詩の内容と深く関わっている場合もあり、連想して使われているだけの場合もある。

詩の大意は、春の月明かりの晩に南の山の辺りに入り、きれいに耕された田や川の堤を歩いていた。南山と言う言葉から白石歌の故事が浮かび、齊の王が堂の下を通るのとは違うな、と思った。

送 府掾佐賢吏（七言絕句）

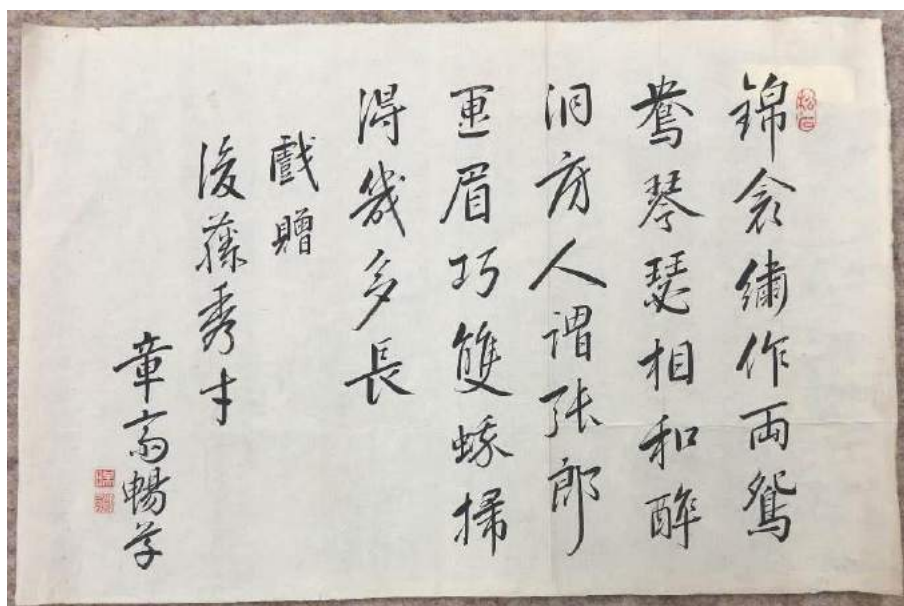


（個人蔵・紙片）

橋頭分手路悠哉 花柳春暄東海隈
白鳥津邊君試問 彩雲生處是蓬萊
送
府掾佐賢吏

章齋暢拜

戲贈 後藤秀才（七言絶句）



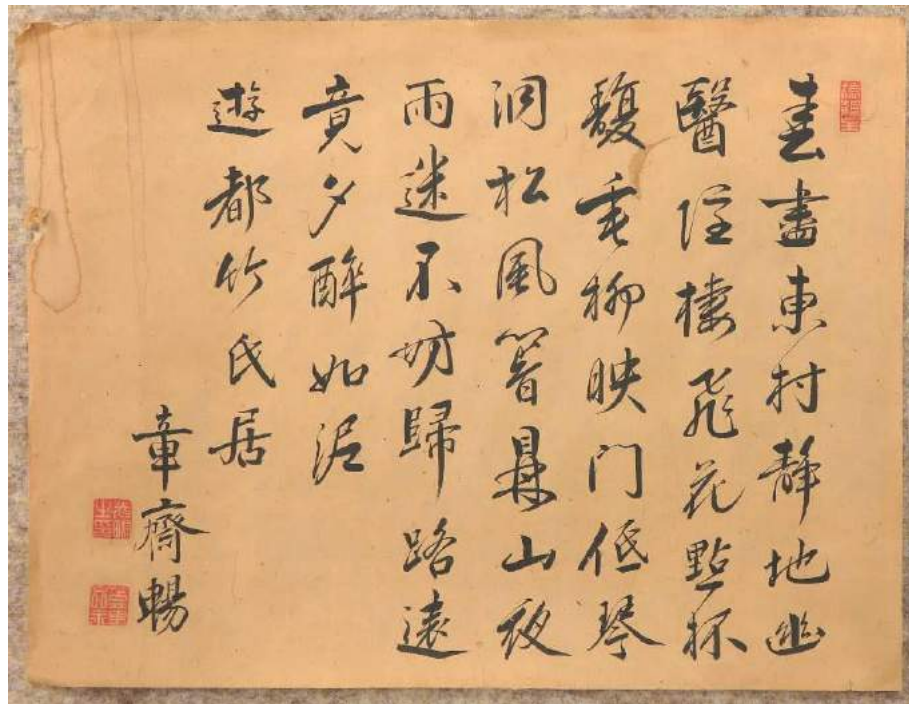
（個人蔵・紙片）

錦衾繡作両鴛鴦 琴瑟相和酔洞房
人謂張郎画眉巧 雙蛾掃得幾多長
戲贈 後藤秀才

章斎暢孝

美しく弓なりに描いた眉の女性と琴を奏でて遊び、酒を飲むみ、仲良く過ごす時を詠んだ詩、戯れに贈るは遊びで作ったものの意。

遊都竹氏居（五言律詩）



（個人蔵・紙片）

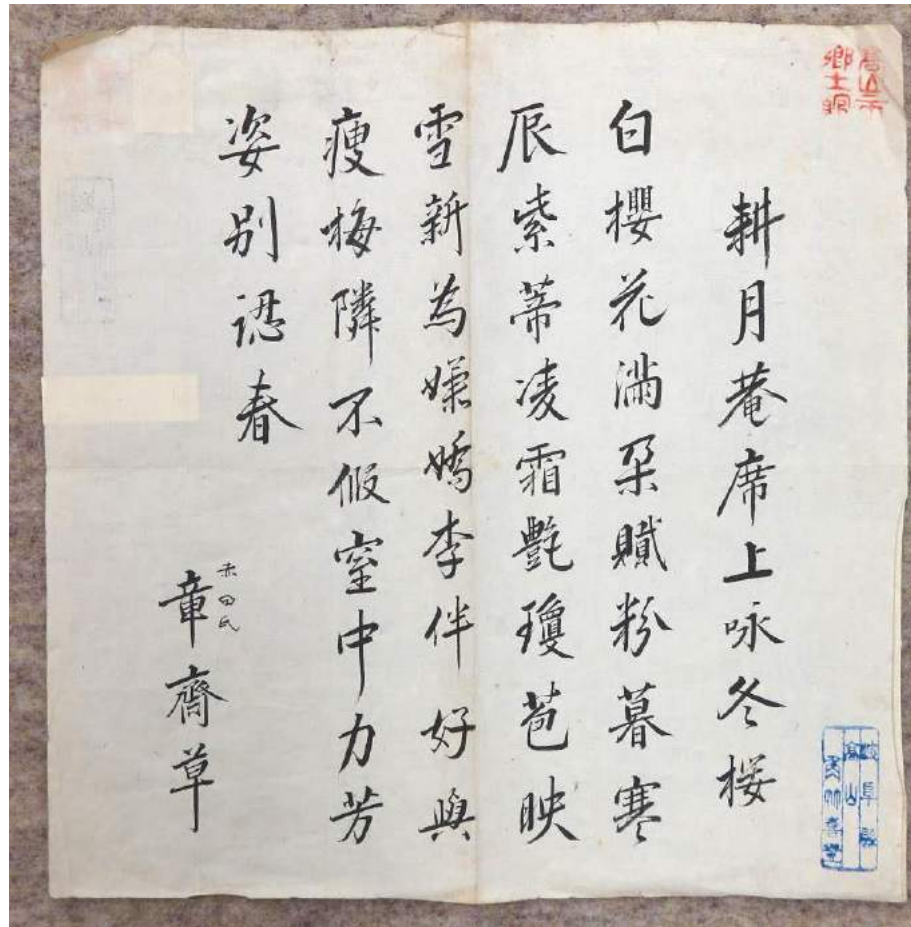
春盡東村静	地幽醫住樓
飛花點杯馥	毛柳映門低
琴洞松風著	■山夜雨迷
不妨歸路遠	竟夕醉如泥
遊都竹氏居	

章斎暢

都竹氏は都竹元通。高山御役所出入医師、大八賀松之木の人。号は琴洞。章斎の門人である。

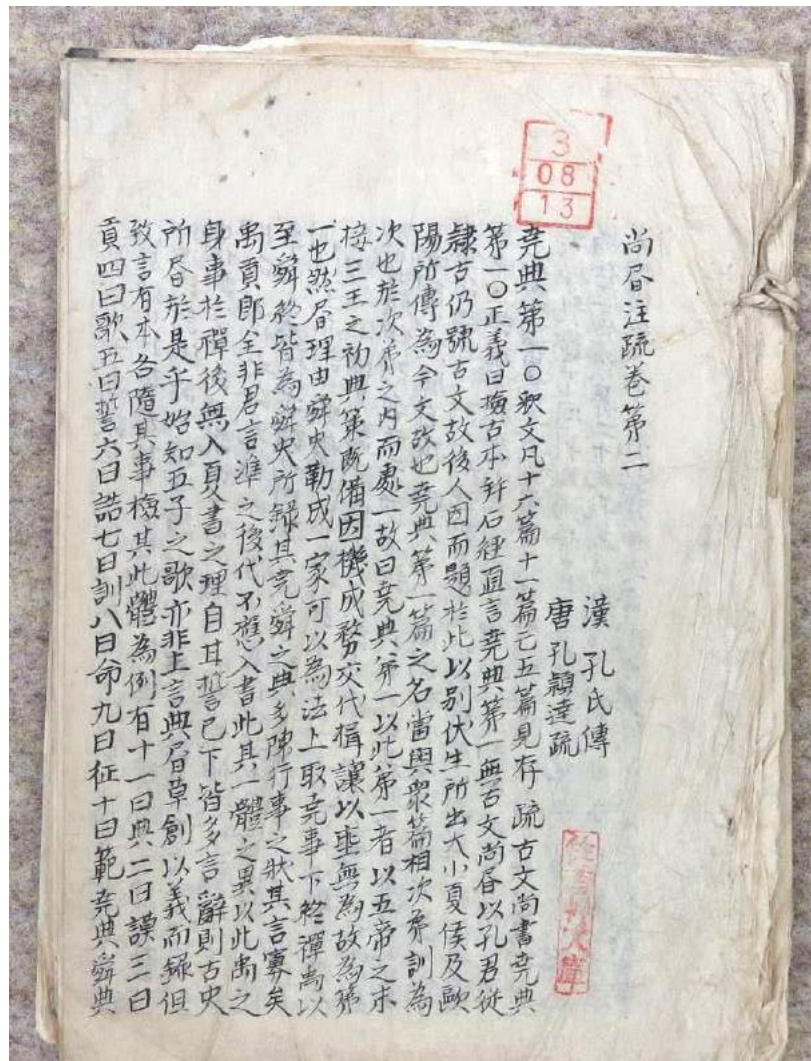
詩の大意は、春の終わり静かな東辺の村（松之木あたり）に医師元通の家がある。花散り、毛のような若柳が美しい。雨が降り出して、帰るかどうしようか、そうしているうちに酔っぱらってしまった。

漢詩（耕月菴席上咏冬桜）



（飛騨高山まちの博物館蔵[角竹 2-46-34]・紙片）

尚書注疏 卷二



(飛騨高山まちの博物館蔵[住 3・08-13]・冊子)

「尚書（しょうしょ）」「書經（しよきよう）」

儒教の五經の一つ。もと単に『書』といい、漢以後『尚書』とよばれ、『書經』と称するのは宋に始まる。『詩經』と並び称せられる古典のなかの古典である。編者は孔子（孔丘）であると伝えられ、上古歴代史官の文書をもとに、堯・舜以下、夏・商（殷）・周三代の帝王の事蹟を百篇の書にまとめたという。史実のほか神話的伝承を含んでいるが、儒家はこれを天下統治の普遍的法則を示すものとして尊重した。

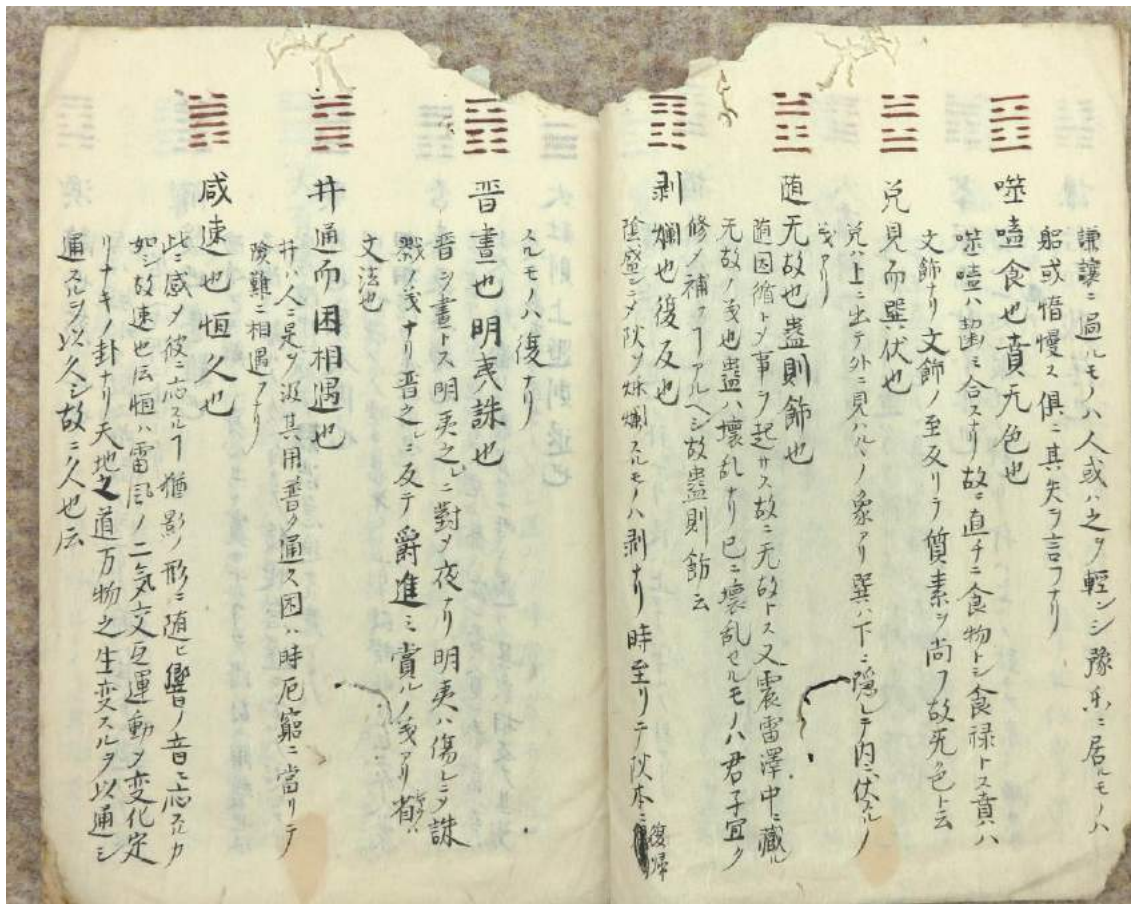
（日本大百科全書より）

「注疏（ちゅうそ）」

中国の儒教の正典である經書を解釈したものを「注」といい、注をさらに詳しく解釈したものを「疏」という。注は、ときに伝、箋、解、学ともいうが、それらを総じて注という。注や疏が生まれるのは、基本的には古典が時とともに読解しがたくなったことによるが、それは漢代に盛んであった訓詁学が始まるといってよい。訓詁学とは經書の一字一句の意味を説明し、そこからいにしえの聖人の教えをひき出そうとする学問である。しかし、一つの經書にも数種の異なるテキストが存在し、それぞれが異なった解釈をしたため、漢代では対立と論争が繰り広げられた。

（世界大百科事典より）

易経 雜卦（文政五年十一月）



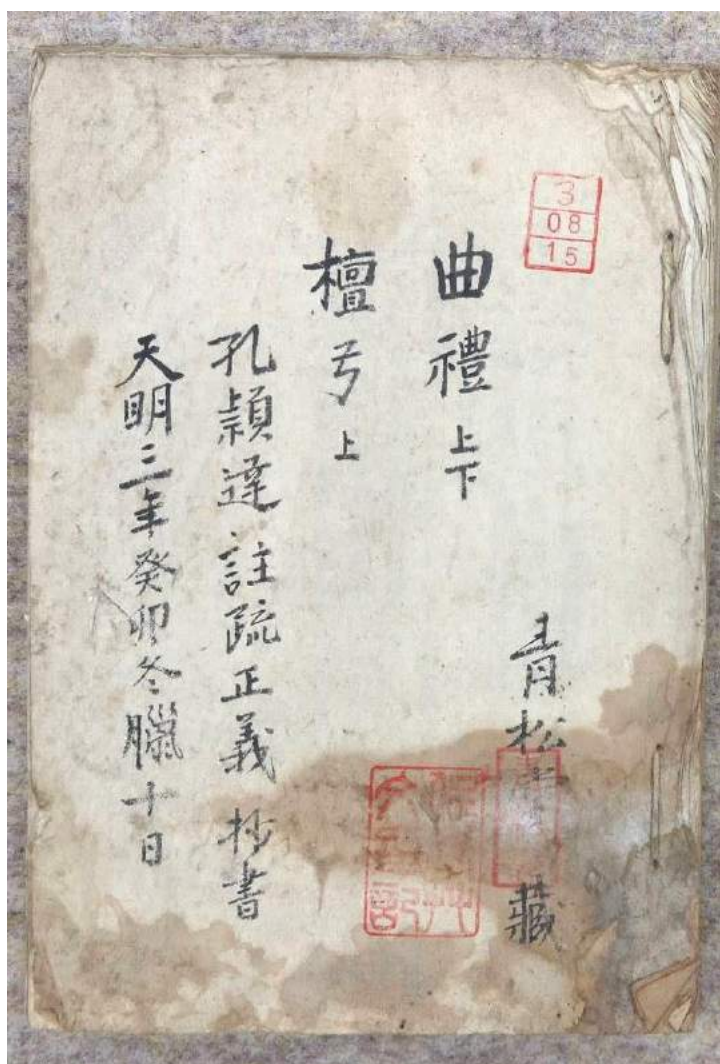
（飛騨高山まちの博物館蔵[住 3・08-14]・冊子）

「易経（えききょう）」

中国、占いのためのテキスト。五経の筆頭に置かれる儒教の經典。《周易》、《易》ともいう。本文（経（けい））は六十四種類の象徴的符号（卦（か））と、そのおのおのに付された短い占断の言葉から成っており、本文の解説（伝（でん））は象（たん）伝をはじめ十編があるので、これを十翼（翼はたすける意）という。《易経》はこの経と伝との総称である。卦とは、**一**（陰の象徴）と**一**（陽の象徴）の棒（爻（こう））をまじり、三本組み合わせる八種類のパターン（八卦（はつか））を作り、次にそれらを互いに重ねて六十四種類にしたものである。

（世界大百科事典）

曲礼 上下 檀弓 上（天明三年十二月）



（飛騨高山まちの博物館蔵[住 3・08-15]・冊子）

「曲礼（きよくらい）」

「礼記」の巻頭の編名。古い礼の定めをこまかく雑記してある。

（大辞林より）

「礼記（らいき）」

儒家の經典で、五經の一。礼についての解説・理論を述べたもの。四九編。前漢の戴聖が古い礼の記録を整理したものといわれ、「小戴礼」ともよばれる。儀礼の解説および音楽・政治・学問における礼の根本精神について述べており、唐代に他の礼書を抑えて五經の中に加えられた。三礼の一。

（大辞林より）

周礼 司服



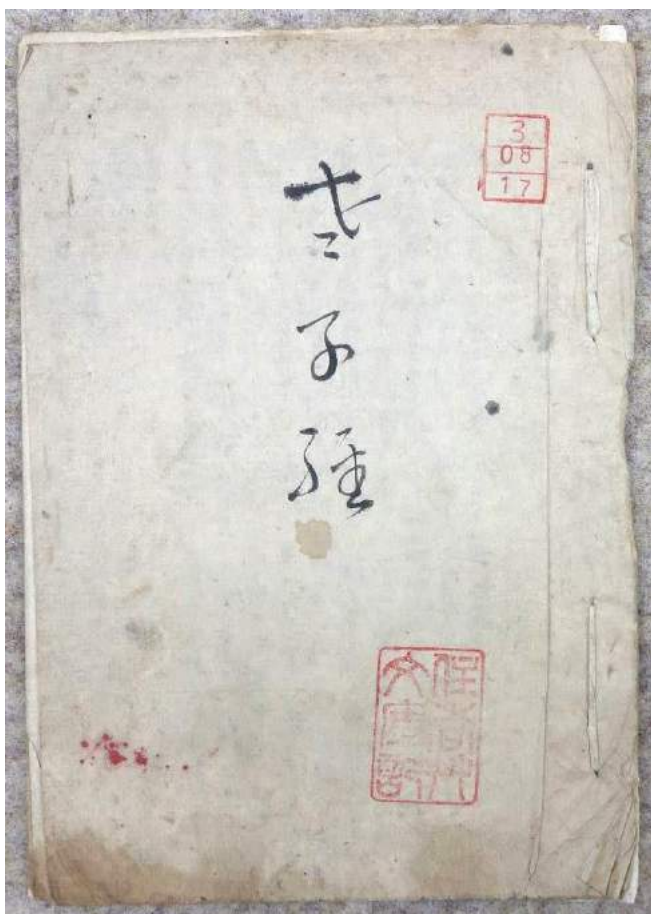
(飛騨高山まちの博物館蔵[住3・08-16]・冊子)

〔周礼（しゅらい）〕

古くは《周官》ともいった。中国古代の礼書、三礼の一つ。西周王朝の行政組織を記述したものとされ、天官大宰、地官大司徒、春官大宗伯、夏官大司馬、秋官大司寇、冬官大司空の六人の長官に統帥される役人たちの職務が規定されている。これら六つの官は、理念的にはそれぞれ六十の官職から成り、合計三百六十という職務は一年の日数に対応するのだとされる。ただ冬官大司空の篇は古く失われ、漢代に替りに《考工記》が補われた。

（世界大百科事典より）

老子経 王弼注



(飛騨高山まちの博物館蔵[住 3・08-17]・冊子)

「老子（ろうし）」

道家の開祖とされる人物。生没年不詳。その著述と伝えられる書物も《老子》と呼ばれる。老子に関する最古の伝記資料である《史記》老子列伝によれば、姓は李、名は耳、字は聃（たん）といい、楚の苦県（こけん）の訪問を受けて礼を問われたこともあるが、周室の衰運を見定めるや西方へと旅立ち、途中関を通った際に、関守の尹喜（いんき）の求めに応じて《道德》に関する書上下二編を書き残し、いずこへともなく立ち去ったといわれる。

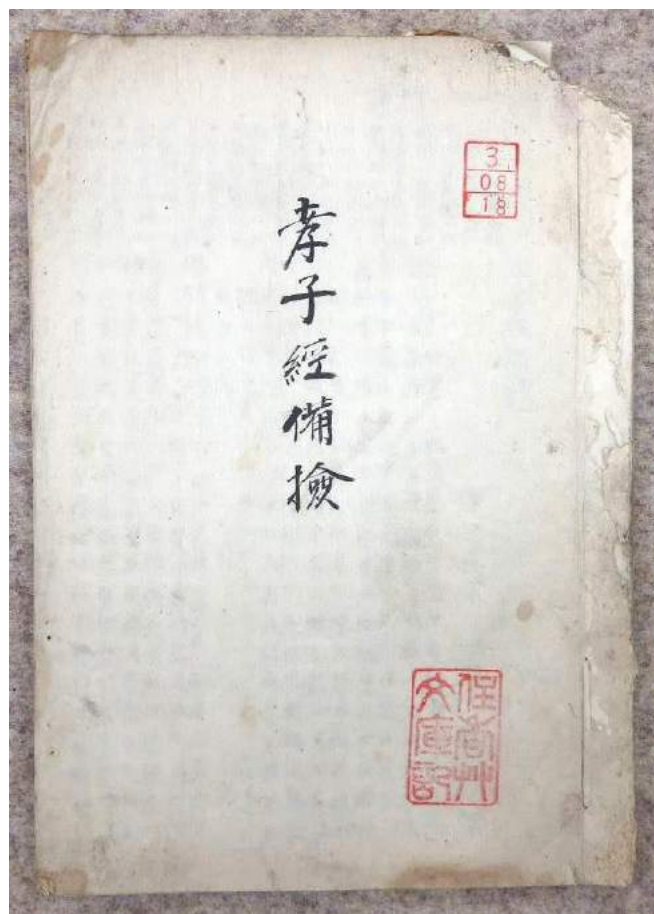
（世界大百科辞典より）

「王弼（おうひつ）」

中国、魏の老莊哲学者で、同時代の何晏（かあん）と並び称される。字は輔嗣（ほし）。山陽高平（安徽省）の人。清談の祖でもあった。十数歳にして深く《老子》《莊子》に通じる天才ぶりを示し、人々を驚嘆させた。その著書《老子注》二巻は、《老子》注釈の古典として重んぜられる。また《周易注》六巻は、老莊学の論理を儒家の經典解釈に応用したもので、彼の代表作に数えられる。わずかに二十四歳で病死した。

（世界大百科辞典より）

孝子経備檢



(飛騨高山まちの博物館蔵[住 3・08-18]・冊子)

度を持たない日本において孝子の概念がどこまで正確に理解されていたか不明な側面もある。
江戸時代には領主により孝子に対する褒賞も行われている。

「孝子（こうし）」

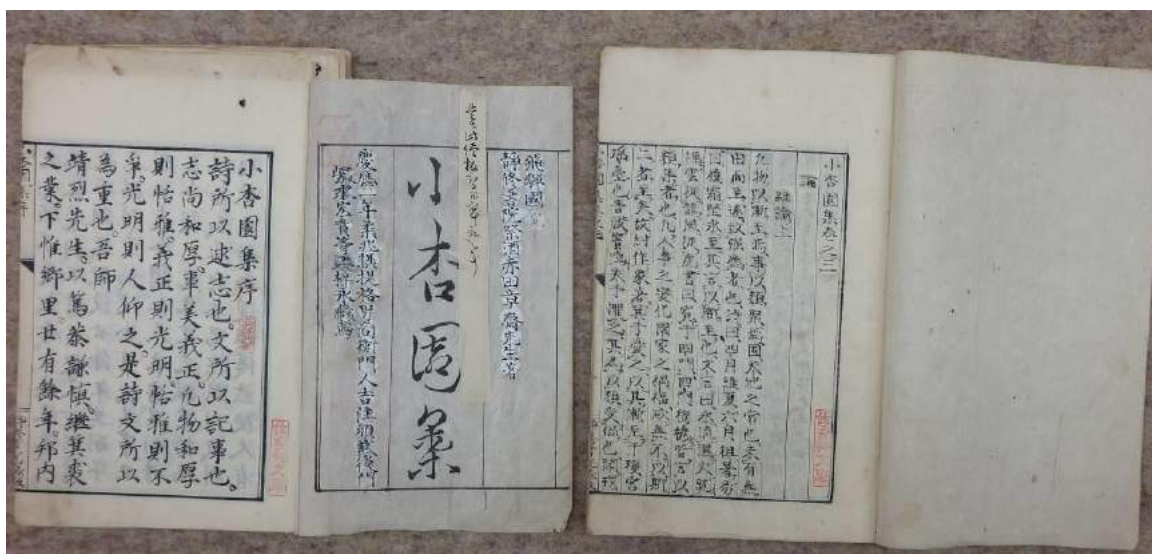
孝子とは、父母によく仕える子供のこと。

中国では儒教において「孝」は最も重要視された徳目の一つであり、古代より顕彰の対象とされた。

日本でも儒教の影響を受けて、律令法に孝子を顕彰する規定が定められた。すなわち、賦役令では孝子・順孫・義夫・節婦の聞こえがある者を太政官に報告し、天皇へ奏聞を行い、その家の門前か所属する里の入口に孝状を掲げてその人物と同一戸の全ての公民に対する全ての課役を免除した。また戸令には国守巡行の際に好学・篤道・孝悌・忠信・清白・異行の行いのある者を見出して中央に推挙することを義務付けている。『続日本紀』にはこれらの規定に基づく措置の記事が見られるが、宗族を主体とした中国的な家族制

(ウィキペディアより)

小杏園集 詩文集版下稿



(飛騨高山まちの博物館蔵[住3・09-32]・冊子)

出版はされていないが、章斎の漢詩集である。序文は『梅村騷動実記』を記した吉住礼助が書いている。吉住は明治になって高山県の農業・鉱山業を取仕切った役人である。

赤田章斎詩文稿



(飛騨高山まちの博物館蔵[住 3・09-33(1~22)]・冊子)

住香草文庫には、「浣華録稿」「藻稿」「章斎稿」などと題した章斎の詩稿が第一から第二十二まで残されている。

住香草文庫（飛騨高山まちの博物館蔵）

住廣造翁が昭和三十九年高山市に寄贈した翁の蔵書。飛騨の山林関係資料・印刷出版関係資料が主であるが、その中に静修書院旧蔵書が含まれる。静修書院旧蔵書には、静修館と赤田三代の姿が分かる貴重な史料が多く含まれている。資料には、臥牛の漢詩集『臥牛集』の手書き原稿が含まれており、多くの添削書き直しが加えられた活き活きとしたものである。出版された臥牛集とは異なる姿を見ることが出来る。又、詩文稿（詩や文を書きためたノート）については、安永三年（一七七五）の臥牛二十代のものから明治四年（一八七二）の誠軒のものまで三代約百年に渡って残されており、大変貴重なものである。

細草新花春到處（屏風六曲一双）



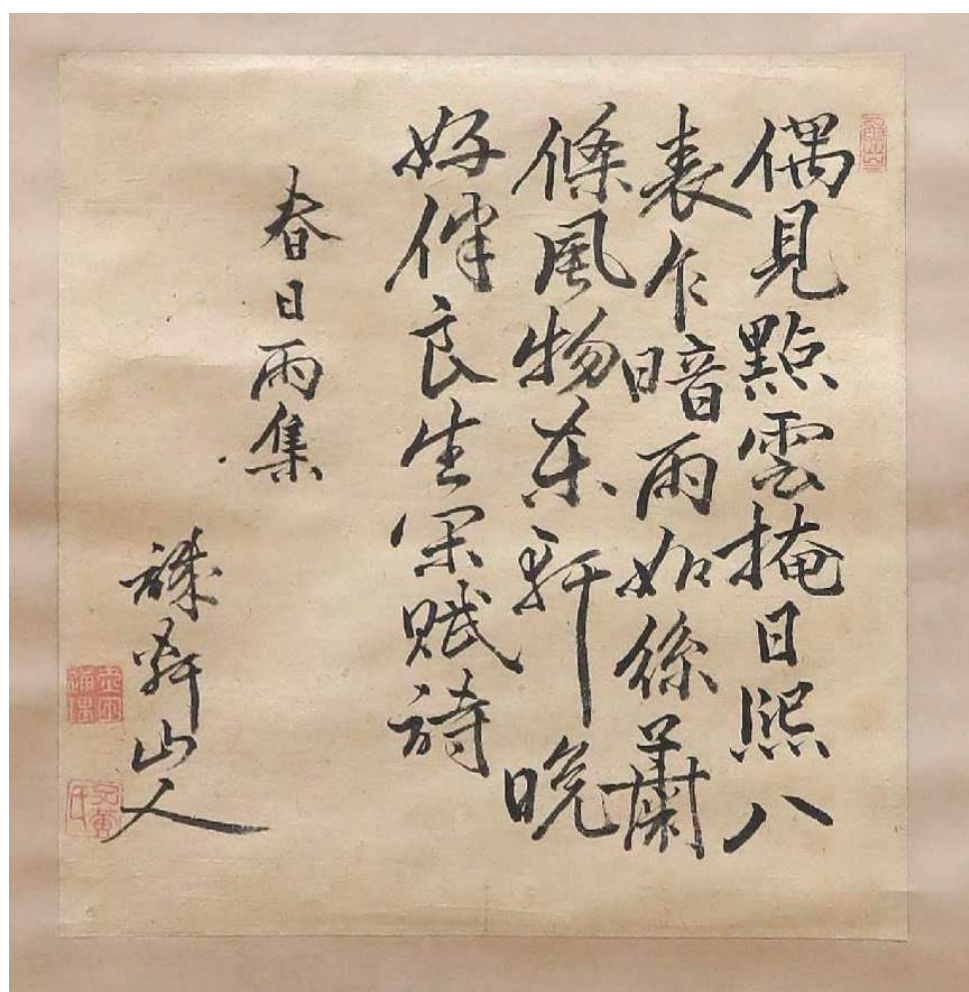
（右隻）



（左隻）

（個人蔵）

春日雨集



(個人蔵・掛軸)

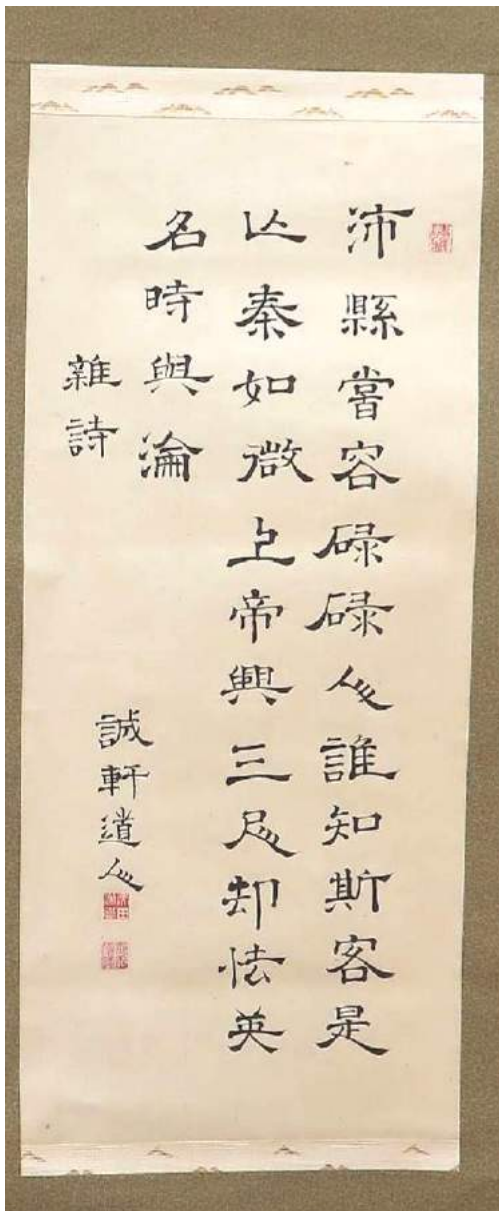
雲が日をおおい、全て暗くなり糸のような雨が降る。全てがものさびしい様子のこの晩、家の軒先で友と一緒に静かに詩を詠じた。

偶見點雲掩日照 八表乍暗雨如糸
蕭條風物東軒晚 好伴良生閑賦詩
春日雨集
誠軒山人

【赤田誠軒】

【赤田誠軒】

雑詩



(個人蔵・掛軸)

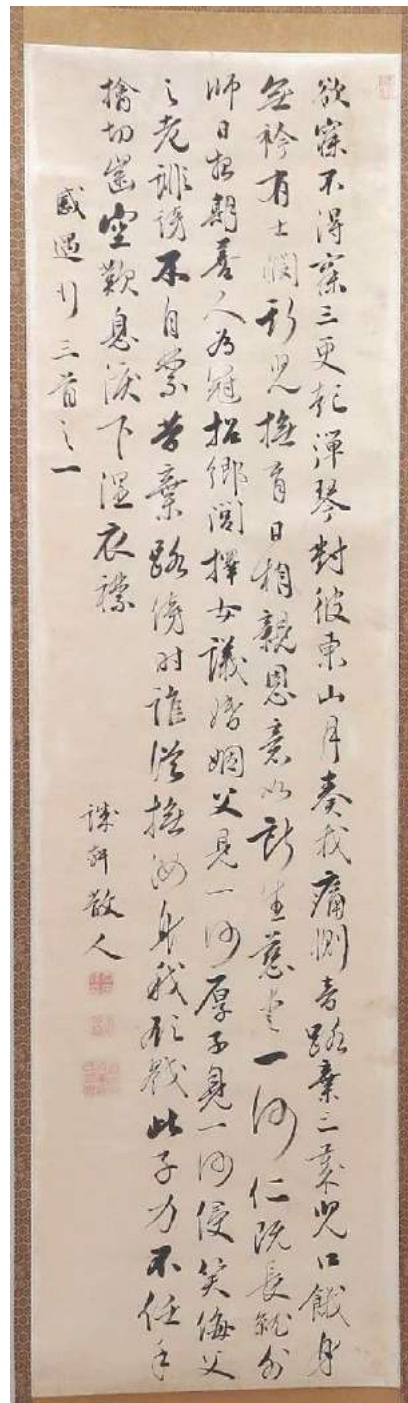
沛県嘗容碌碌人 誰知斯客是亡秦
如微上帝興三尺 却怯英名時與淪
雑詩

誠軒道人

沛県は秦を滅ぼして漢朝を創始した高祖劉邦の出身地。沛県にいたどこにでもいそうな人が秦を滅ぼすなど一体誰が想像しただろうか？

三尺は劉邦が庶民から出て「三尺の剣」でもって天下を取ったという故事によることば。残念ながらそんな英雄の名も時と共に消えていくのだ。

感遇行三首



(個人蔵・掛軸)

五言排律

欲寐不得寐 三更起彈琴
對彼東山月 奏我痛惻音
路棄三歲兒 口餓身無衿
有士憫行兒 撫育日相親
恩意如所生 慈愛一何仁
■長就外師 日夜期喜人
為冠招鄉閭 擇女議婚姻
父見一何厚 子見一何侵
笑侮父之老 誹謗不自禁
昔棄路傍時 誰從撫汝身

我願戮此子 力不任手擒

切齒空歎息 淚下濕衣襟

感遇行三首之一

誠軒散人

所生 父母 生まれた所

一何 いつになんぞ なんと…であろうか

郷閭 村里の人

「父見一何厚 子見一何侵」

見 おもう／侵 そこなう、はずかしめる

手擒 とりこ つかまる 捕虜

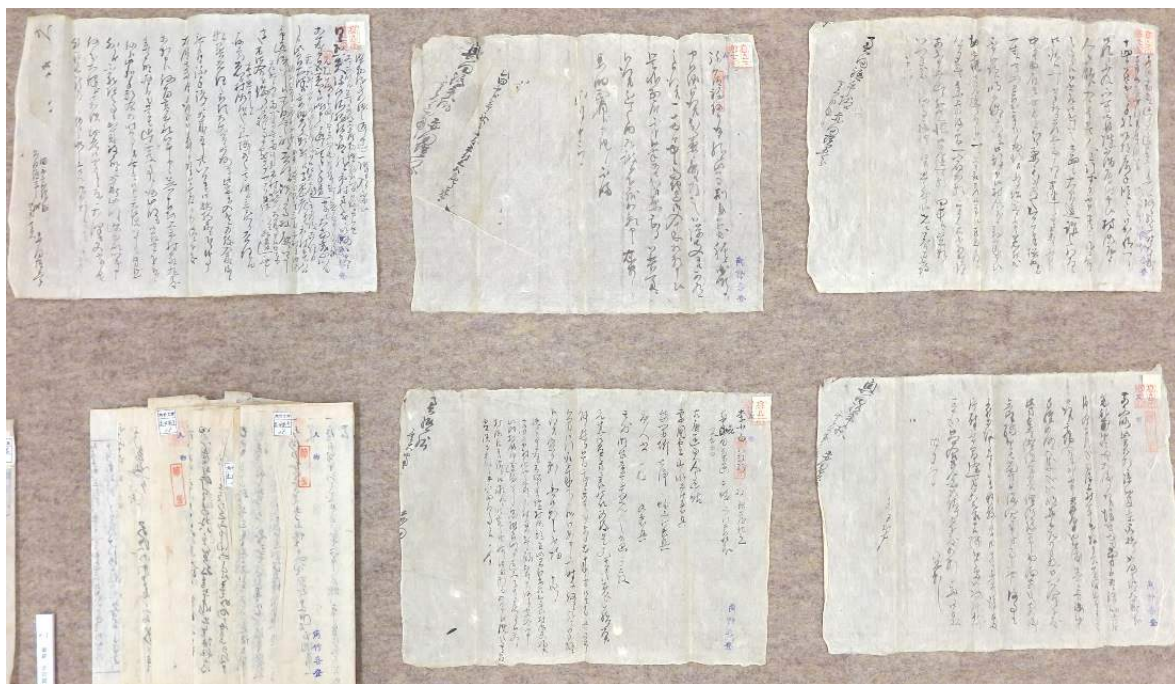
切齒 悔しい 齒ぎしりするほど悔しい

ある憐みの心ある人が路に捨てられた小さな子供を我が子のように大切に育てた。教育を受けさせ、立派に成人させ、妻も探した。父は手厚く育てたと思ったが、子は干渉されたと感じ、父が老いるのを喜び、かまわず悪口を言う。

かつて捨てられていたおまえを一体誰が大切に育てたと言うのか？

こんな子は殺してしまいたいほどだが捕えることもかなわぬ。齒ぎしりするほど悔しく、涙で袖を濡らすばかりだ。

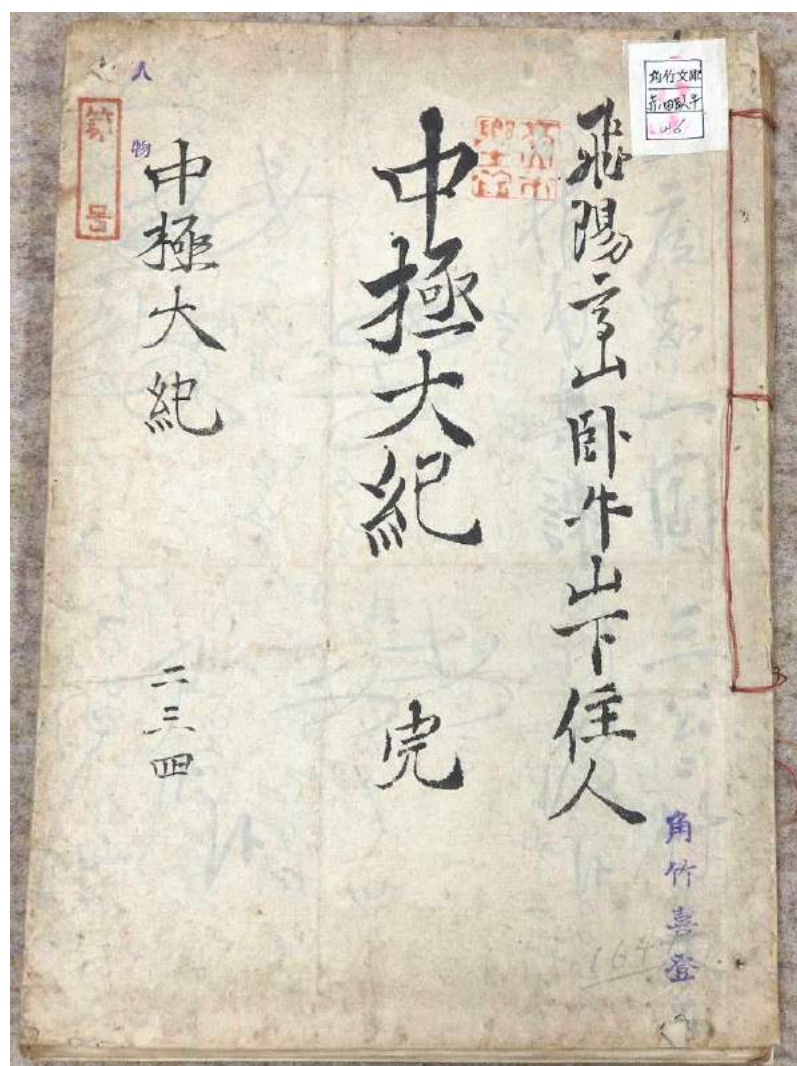
赤田誠軒書簡



(飛騨高山まちの博物館蔵[角竹 2-46-35(1~43)より抜粋]・書簡)

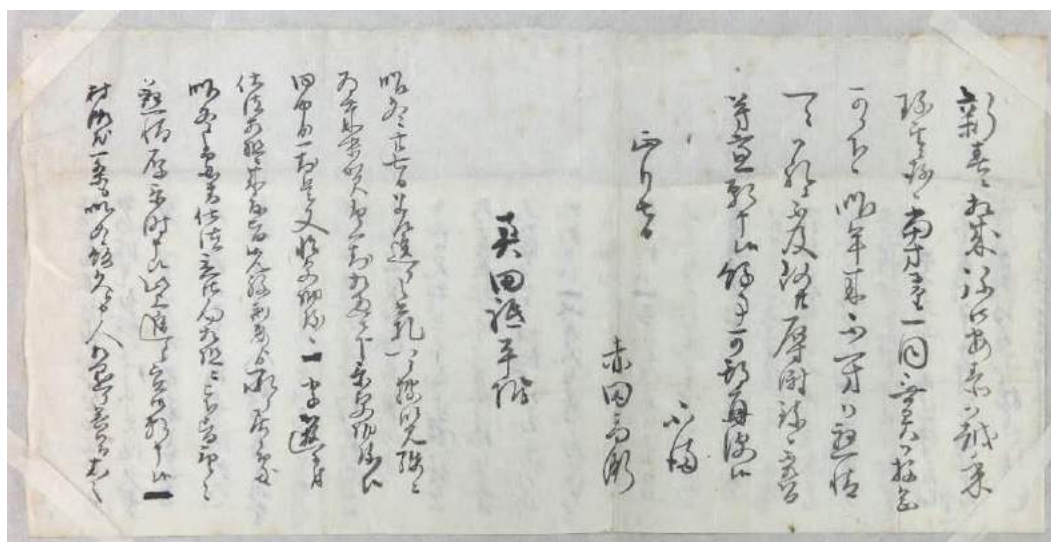
宛先は全て奥田祇兵衛 祇兵衛は誠軒の門人で、最初の高山町会議員。園芸家で、丹生川の千光寺にスギ・ヒノキ数万本を植えた。牡丹の栽培でも有名だった。

中極大紀



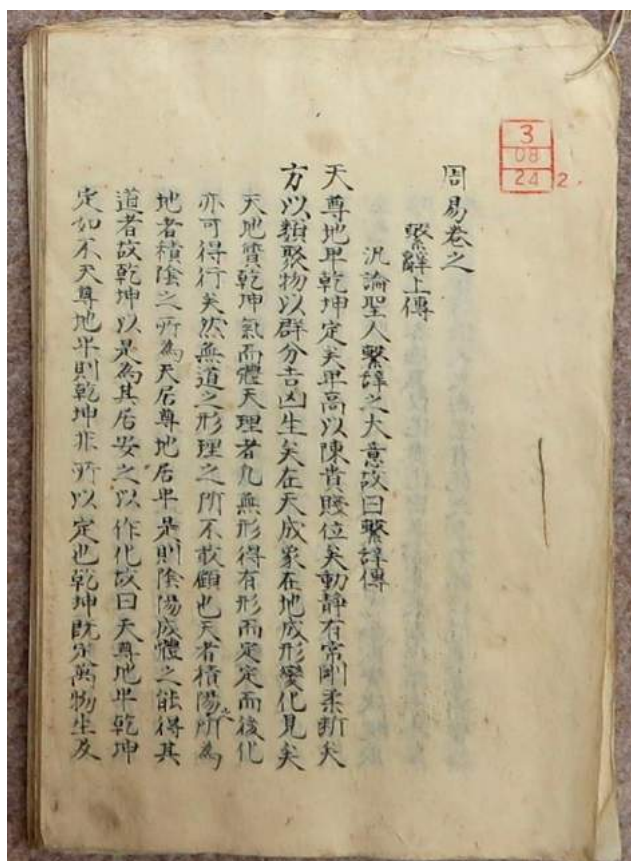
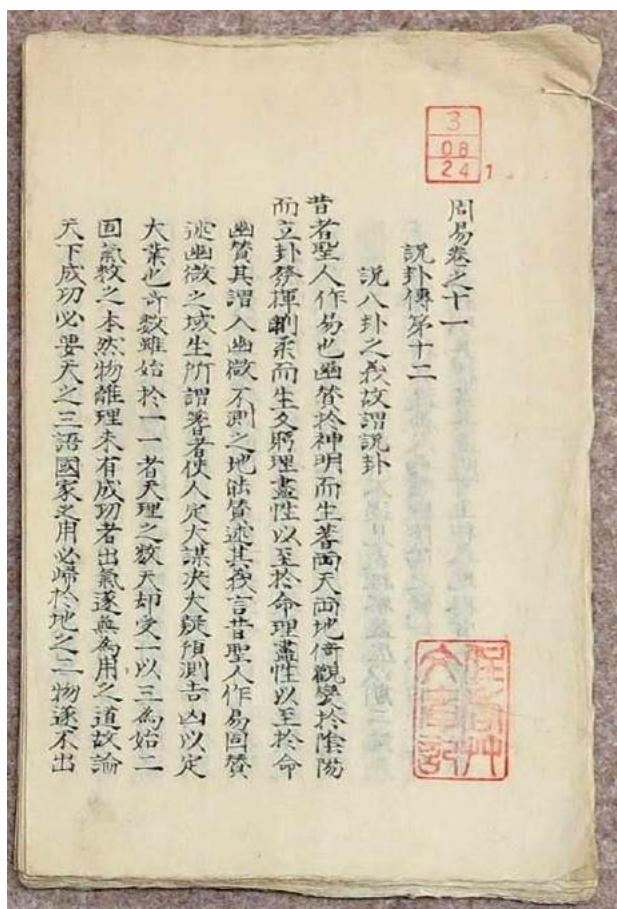
(飛騨高山まちの博物館蔵[角竹 2-46-36]・冊子)

筆跡 赤田誠軒



(飛騨高山まちの博物館蔵[角竹 2-47-3]・文書)

64 周易 卷一一 說卦伝第十二、 卷 繁辞上傳



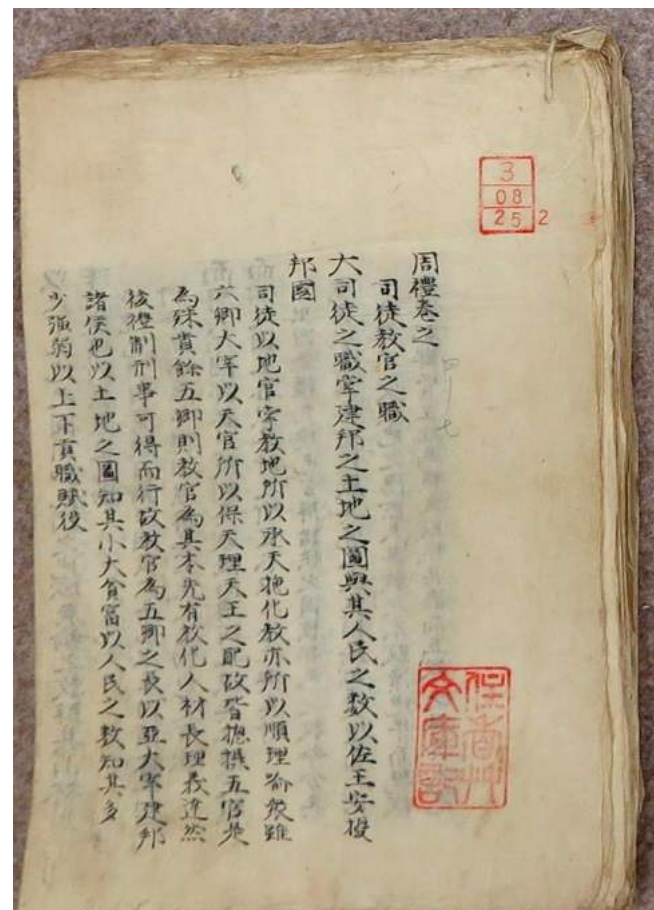
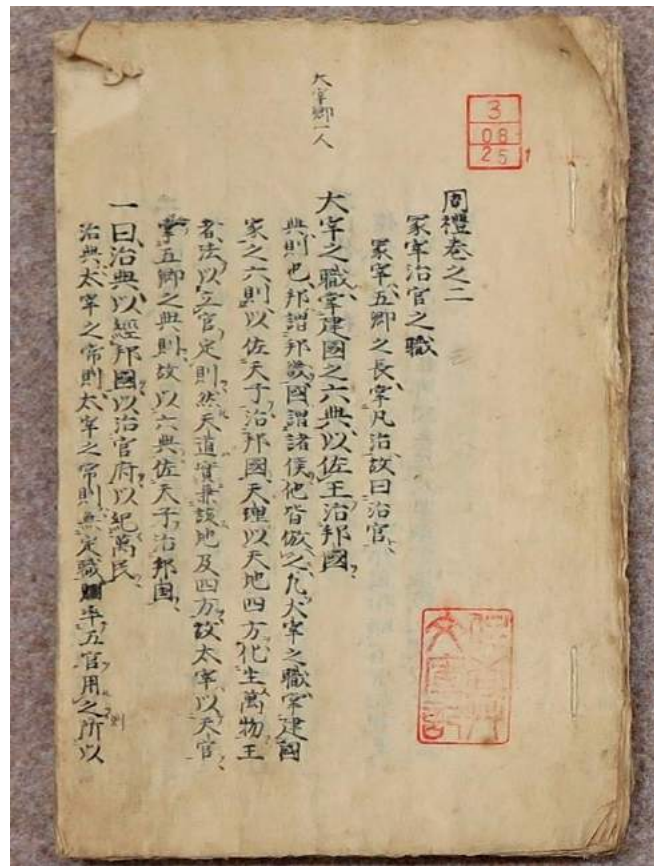
(飛騨高山まちの博物館蔵[住 3・08-24(1、2)]・冊子)

〔周易（しゅうえき）〕

中国、周代に行われたとされる占い法。三易の一。陰陽説に基づき、陽を☰、陰を☷で表し、その記号の組み合わせで八卦を作り、さらに八通りに組み合わせせて六十四卦としてそれぞれに名を与え、これによって宇宙万物の生成・発展・消長を説明しようとするもの。太古の聖人伏羲が八卦を作り、周の文王が各卦に説明をつけ（卦辞）、周公が解釈し（爻辞）、孔子がその原理を明らかにした（十翼）といわれているが、実際には、戦国末から漢代中期にかけて集大成されたもの。後世、易経として五経に加えられた。今日、易といえば周易をさす。易。易経。

（大辞林より）

周礼 卷二一七



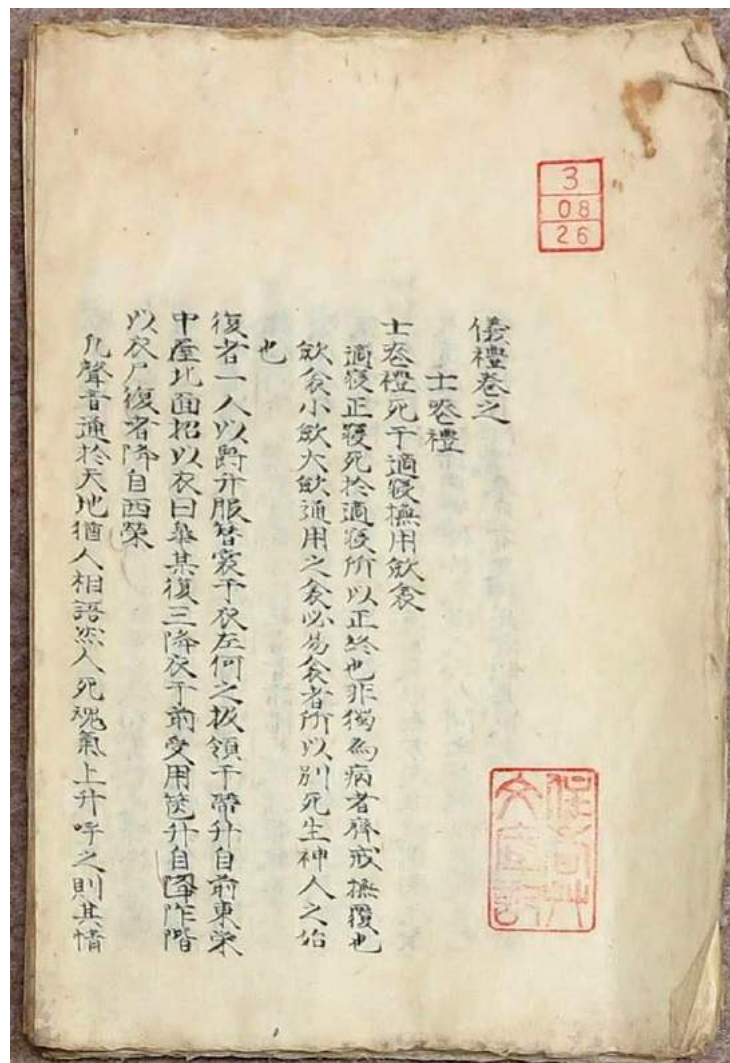
(飛騨高山まちの博物館蔵[住 3・08-25(1、2)]・冊子)

〔周礼（しゅらい）〕

古くは《周官》ともいった。中国古代の礼書、三礼の一つ。西周王朝の行政組織を記述したものとされ、天官大宰、地官大司徒、春官大宗伯、夏官大司馬、秋官大司寇、冬官大司空の六人の長官に統帥される役人たちの職務が規定されている。これら六つの官は、理念的にはそれぞれ六十の官職から成り、合計三百六十という職務は一年の日数に対応するのだとされる。ただ冬官大司空の篇は古く失われ、漢代に替りに《考工記》が補われた。

（世界大百科事典より）

儀礼 卷 士喪礼



(飛騨高山まちの博物館蔵[住 3・08-26]・冊子)

〔儀礼（ぎらい）〕

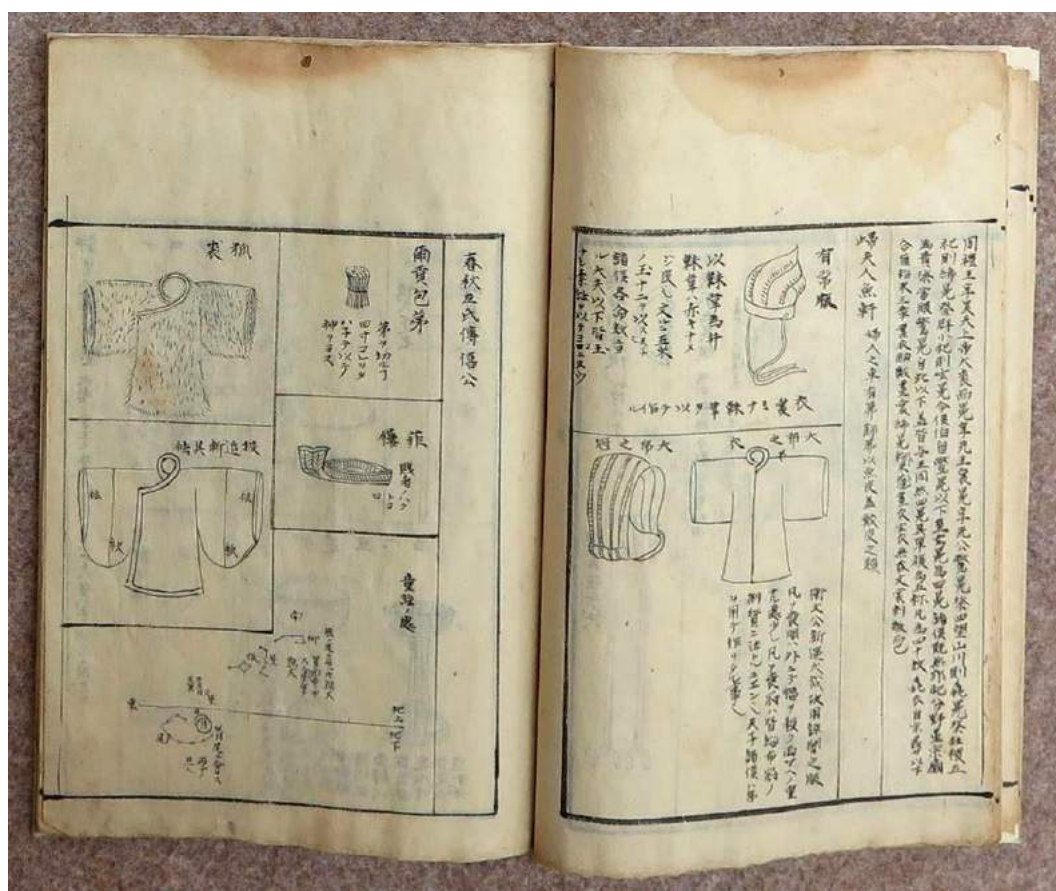
中国古代の礼書、三礼の一つ。三礼の他の二つ、《周礼》が仮構された国家組織を述べ、《礼記》が断片的な礼の規範を取り上げて〈礼の精神〉を説こうとするのに対し、《儀礼》の本文は純粹に儀式の次第のみを記述しようとする。三礼の中でも最も早く成立したものであろう。《儀礼》が記述する儀式は、士冠礼（成人式）・士昏礼（結婚式）・士葬礼（葬式）などへ士階層の人生の通過儀礼、郷飲酒礼・郷射礼など共同体の祭礼、聘礼・覲礼など官僚として他国や天子のもとに出張した際の礼儀作法など、全部で十七編からなる。

（世界大百科事典より）

〔士喪礼〕

士の階級にある者が、その両親を葬る際の儀礼を扱っている。

左氏伝図解 卷一一七残欠

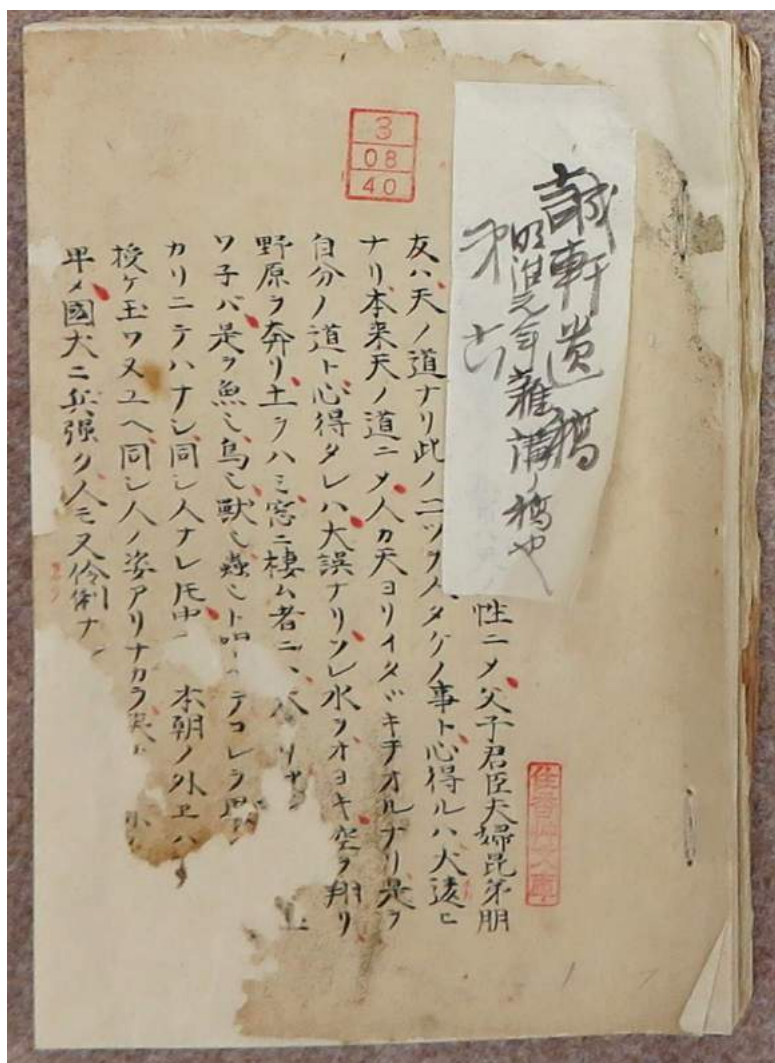


(飛騨高山まちの博物館蔵[住3・08-28]・冊子)

「左氏伝（さしでん）」

中国の古典。《公羊伝》《穀梁伝》とともに《春秋》の三伝（解説書）の一つとされる。《左伝》とも簡称。孔子の弟子の左丘明の作と伝えられるが疑わしい。初めて学術思想界に紹介されたのは前漢末のことである。《公羊伝》《穀梁伝》が《春秋》に託された孔子の精神を純理的に解明するのに対して、《左氏伝》は史実に即して歴史的文学的に説くのを特色とし、《春秋経》から独立した歴史物語としても、文学的に高く評価される。

（世界大百科事典より）



(飛騨高山まちの博物館蔵[住 3・08-40]・冊子)

赤田誠軒詩文稿



(飛騨高山まちの博物館蔵[住3・09-36(1~11)]・冊子)

住香草文庫には、誠軒の詩稿が第一から第十一まで残されている。

第十の詩稿の最後には、明治になって改名した平泉姓が書かれている。下の名前は何度も変えており、平泉瓊次郎は明治四年の改名。

「誠軒は梅村知事と意見が合わず出奔」などと高山市史その他に記述があるが、梅村騒動が明治二年、速水が亡くなったのが明治三年である。この資料が明治四年以降のもので静修館の蔵書として残っていることからすると知事任中に退任したわけではないかもしれない。

誠軒が何年に静修館を閉じたかははっきりしないが、最後の一枚物の詩が「推定で明治四年二月」となっていることから、この辺りかと思われる。その後誠軒は飛騨を去るが、明治六年再び高山に戻り病没した。



(個人蔵・額装)

【附録..『岐阜県教育史 第二部』
寺子屋・郷学 高山教授所】
(写)

第二部 寺子屋・郷学

郷学

高山町教授所

五〇 高山町教授所取建願

○岐阜県歴史資料館所蔵

乍恐以書付奉願上候

一教授所

但 表口 四間半
裏行 五間

壱基

右は今般高山町幼童読書之儀、赤田屋新助方え一同頼入候所、
同人方居宅類焼後間狭ニて席無御座候ニ付、同人扣地之内南
側ニ明屋敷有之候所え、書面之教授所席取建申度奉願上候、
勿論木品之儀は、先達て新助方ニて酢小屋ニ御願申上置候御
免之用木有之候事故、右木品相用ひ申候、且地隣等故障聊無
御座候、依之連印を以御願奉申上候、右願之通御聞濟被下置
候ハ、一同難有仕合ニ奉存候、以上
文化式丑年三月

和田屋 忠右衛門印
田中屋 半次郎印
野口 養安印
上木屋 徳次郎印

高山御役所
右之通一同奉願上候ニ付、御聞濟被下置候ハ、難有奉存候、
以上

一教授所 表口 四間半
裏行 五間

絵図

(ココニ絵図アルモ省略ス)

吉野屋 清三郎印
奥田屋 小平次印
笹屋 安右衛門印
打保屋 忠次郎印
上木屋 甚四郎印
加賀屋 長右衛門印
福島屋 清左衛門印
鍵屋 与作印
木主 赤田屋 新助印
組頭并地隣 石井屋 弥右衛門印
矢嶋茂右衛門印
屋貝權四郎印
川上九良四郎印

一九四

(五〇)

飛驒郡代高山陣屋文書
飛驒三万三千石は、

天正一三年(一五八五)以来金森氏の領地であつたが、元禄五年(一六九二)金森氏の移封により幕府直轄領となつた。以後、代官・郡代二五代の支配が続いた。したがつて、教授所の建設も幕府の許可が必要であつた。

³³⁾ 打保屋

飛驒で旦那衆の一人といわれている平田家。

飛驒で旦那衆といわれるのは名家十指に余るが、その初代が何を商つて産をなしたか、文獻的に明らかではない。

日下部家は、飛驒と越中の境にある谷村から出て茶の行商をしたといわれ、平田家は打保村から出てきて蟹つけ油の商いをしたと伝えられている。

屋号には村の名前をつけることが多かった。

右入用木覚

一 松角	貳間 四寸	貳拾六本	是は柱并ニつか柱ニ相用申候
一 同	貳間 四寸	拾四本	是は桁ニ相用申候
一 同	貳間 五寸	拾本	是は梁ニ相用申候
一 同	貳間 六寸	八本	是挽割櫓・垂木ニ相用申候
一 檜角	貳間 五寸	五本	是は挽割造作木ニ相用申候

右は先達て御免之用木所持仕候ニ付、此度右木数相用申度奉
存候、依之乍恐書付を以御届奉申上候、以上

文化式丑年三月

高山御役所

用木所持主
赤田屋
新 助印
壱之町組頭
石井屋
弥右衛門印

附 高山町和田屋忠右衛門等教授所取建願

○岐阜県歴史資料館所蔵

前書之通御願申上候処、為御見分各様御越、木品・寸間・御
極印并地所被成御改候所相違無御座候、依之町内隣家故障之
儀無之哉御糺御座候、右普請之儀ニ付、決て差障之儀無御座
旨申上候ニ付、願之通被仰渡難有奉存候、然上ハ無御訴普請
仕、添木ハ勿論余木聊相用申間敷旨被仰渡奉畏候、依て組内
連印之継添御請証文差上申候、以上

郷 学

(文化二年)
丑四月

松村部左衛門殿
石黒良八殿

五一 高山町教授所取建上申書

○岐阜県歴史資料館所蔵

飛州高山町教授所取建候儀ニ付申上候書付

私支配所飛州之義、一円山国ニて打並ひ場所無御座、人物も
右ニ准し野鄙ニて、物事理非之弁薄く、我意強、公事多有之、
陣屋元高山町之義も相応之町場ニは御座候得共、是又同様実
意之薄、風儀不宜場所ニ御座候、然る処、此度右町重立候者
共願出候は、同町ニ赤田屋新助と申者有之、父は臥牛³⁴⁾と申、
隠居仕罷在、父子共学才有之、至て篤実ニて、是迄在町幼童
讀書指南、并五常之道教授等仕候処、同人居宅間狭ニ付、行

願人壱ノ町惣代
和田屋
忠右衛門印
同断式ノ町惣代
福嶋屋
清左衛門印
同断木主ノ壱町五人組
赤田屋
新 助印
同町組合惣代
田中屋
半次郎印
同断南地隣組頭
石井屋
弥右衛門印

日下部家の場合は谷
屋である。
他国から来た者は、
二木家の加賀屋、森家
の大坂屋等がある。
(五〇附)(五一)
飛騨郡代高山陣屋文
書

³⁴⁾ 臥牛

赤田臥牛(一七四七
一八二二)。赤田家は
代々酒造業を営んでい

第二部 寺子屋・郷学

届兼候間、志有之もの共申合、諸人用持集、新助居屋敷之内、明地之場所へ教授所取建、広く読書指南教授等行届候様仕度、左候得は幼稚より五倫之道も相弁、自然と質直ニ相成、往々風儀も相直り可申候間、教授所取建之義、聞済有之候様いたし度旨重立候もの共相願申候、右は奇特之志ニも有之候間、願之趣、承届置申候、依之此段申上置候、以上

(文化二七)
丑四月

田口五郎左衛門

五二 高山町教授所場所替願

○高山市郷土館所蔵

乍恐書付を以御願奉申上候

一 教授堂

宅基

但 東西六間
南北四間

右ニ附添

書学稽古場

但 東西六間
南北六間半

右は先年、田口様御支配之節御願奉申上候て仮建仕、年々引続教授仕候処、建繁り候町並ニては何となく閑候得は、幼童稽古事自然と懈怠ニも相成可申歟、且非常之火災等気遣敷、依之閑静之地へ引移申度奉存候内、此度類焼仕候ニ付、字馬場通東側堀之角、私所持之屋敷畑、外ニ大坂屋七左衛門所持之屋敷畑借請、右之地所へ引移致再興、教授出精仕度奉存候、尤教所ニ附添候稽古場追々建添仕度、但用木之儀は迫て別段御願奉申上度候、右地所ニ付故障之筋決て無之候、乍恐御慈悲之上、御聞済被為成下置候様謹て奉願上候、以上

天保三辰年十二月

高山御役所

願人 高山宅之町 赤田屋	新助	畑主 同式之町 大坂屋	七左衛門	取持人惣代 同老之町 和田屋	忠右衛門	同断 同町 上木屋	徳次郎	同断地隣兼 同式之町 加賀屋	長右衛門	地附組頭 同宅之町 天木屋	源次郎
--------------------	----	-------------------	------	----------------------	------	-----------------	-----	----------------------	------	---------------------	-----

一九六

た。臥牛は幼少時代から学問を好んだ。津野滄洲の取り計らいによって尾張藩儒の松平君平などに学び、大成した。

その子の章斎は、通称晋助といい、臥牛に教えを受け、教授所の教授となつて、その発展に尽くした。

章斎の子の誠軒は、明治期に入つて高山県知事として赴任した梅村速水と対立し、自ら飛驒を去り、金沢へ移った。

なお、梅村速水（一八四二—一八七〇）は、水戸藩士で二七歳で高山県知事に任命され、新しい政策を実施した。しかし、それ故に飛驒の人々の反感を買ひ、梅村騒動に発展した。一揆側に敗れた梅村は逃げる途中胸を撃たれて重傷を負った。知事を解任させられ、獄中で死亡した。

99

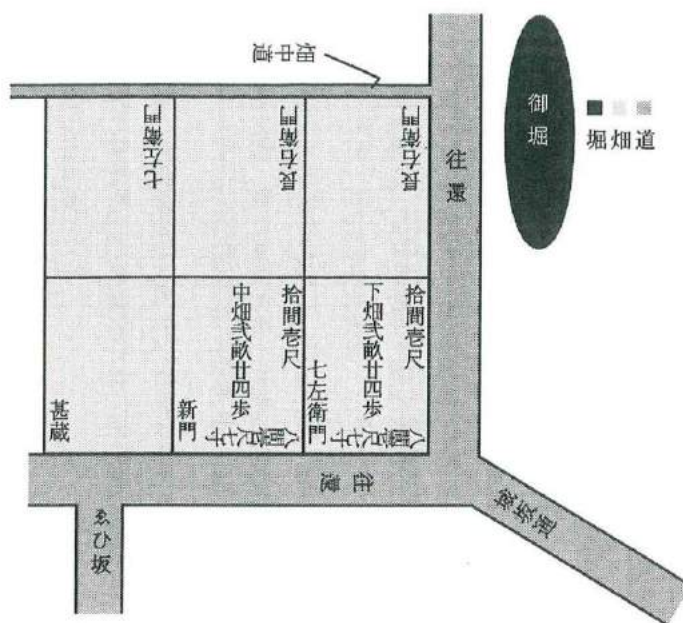
田口五郎左衛門

嘉古。文化元年（一八〇四）四月二五日、第一六代郡代に補せら

附 高山町教授所絵図面

教授所絵図面

○高山市郷土館所蔵



前書絵図面之通、私所持之屋敷堀外ニ大坂屋七左衛門所持之堀借請、教授所地所替再興仕度、御願奉申上候処、御聞濟被成下難有仕合奉存候、右地所ニ付双方故障之筋決て無御座候、引移し候上は、御年貢諸役等私より急度相勤可申候、尚絵図面之外、足地等少分たりとも無御訴望仕間敷候、為後日継添

郷学

印形仕候、以上

天保三辰年十二月

町年寄中

前書之通、私共立会承知仕候、依之奥書印形仕差出申候、以上

本人

赤田屋

助印

組頭

天木屋

源次郎印

北附組頭

竹曲屋

忠右衛門印

同断

村瀬屋

孫兵衛印

五三 高山町教授所規定書

○高山市郷土館所蔵

(表紙)

教授所規定書写

教授所規定書

一教授所之儀は、先年某様御支配中故赤田屋臥牛井有志之輩、御願申上御聞濟之上、今朝御達ニ相成、静修館と号し、赤田氏家塾にて有之候処、去ル辰歳類焼後、赤田屋章齋再興之志有之、社中世話方之者御願申上、御取ノ菊田様并御頭取様方御賢慮を以て國中教授所ニ被為仰付、今般五両講二十口御取立被為下、三ヶ年ニ金三百両教授所ニ相預り、右之内百貳拾両を

れ、六月七日高山へ着任した。同八年(一八一二)二月一八日に死去し、高山大雄寺に葬られている。

第二部 寺子屋・郷学

以て海老坂之上地面を借受、願上之上教授所普請被為仰付、殘金百八拾兩於御役所御廻し被為下、二拾ヶ年之間毎年金拾八兩ツ、足物講方之者共ニ御下ヶ被為下、年限相済候上は、元金百八拾兩全ク教授所永続金相成候事

一 右永続金之儀講方年限相済候上は、町御年寄方并講方之者共支配仕、五米判を以て相廻し、毎年金九兩ツ、足物を取立、教授所修覆并書物藏相建、年々之足物を以て書籍買取相納候様仕可申事

一 若シ有志之輩貧窮ニて学問修行難仕様之者有之節は、其人物を見立、永続金足物之内を以相手伝勤学為仕候様執斗可申事

一 右永続金之儀、聊たり共他事ニ相用申間敷事

一 今般再興仕候教授所之義は、願上之上、國中持ニ被仰付、永々講方之者一同世話仕可申事

一 赤田屋晋助義は、社中世話方之者願上之上、於教授所学問引立方被仰付、学問修行之者は勿論、農事閑暇之節を見合、村方えも相回り、五倫五常之道を教諭仕可申事

一 五倫五常之道教諭仕候身分ニ有之候上は、其身行状正敷、家内親類睦敷、世間交厚国中之人々之本共相成候様、平生相心得、子孫永々右躰之学者相続仕候て、永代教授所可為先生事

一 身持は宜敷候共、学業ニ怠ル乎、或学問は達候共身持不宜、学問修行之生徒引立方薄、国中之手本共不相成様之人物は、赤田子孫たり共、教授所之先生ニ用申間敷事

一 教授所先生或ハ当病、或ハ村方教諭ニ相廻り候様之節は、社中之内可然人物一日ツ、教授所へ相詰、書生引立油断無

之様仕可申事

一 教諭所先生之儀、若シ不行届之事有之節は、社中并世話方之者ハ不及申、其外懇意之者より篤ク心を付、不行届之儀無之様取計可申事

一 今般晋介并社中世話方之者共、取締方規定仕御願申上、御聞済之上、右之通從御役所被仰出、一同納得仕、規定書印形仕候処仍て如件

年号

天保六乙未年正月写之

谷 磯石

連印

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十九年三月発行

編集 一般社団法人 高山市文化協会
印刷 飛驒印刷株式会社

高山市西之一色町三一六四七―二八
電話 〆〇五七七〱三三―一一九二(代)